

二重君主国期ハンガリーにおける責任内閣制の運用（一）

平田 武

はじめに

一 妥協から党合同を経て

1 一八六七年の妥協と責任内閣制

2 デアーク党政権期の歴代内閣

3 一八七五年の党合同からティサ・カールマーン内閣まで（以上、本号）

二 自由党政権後期

三 憲法危機と君主国末期

おわりに

はじめに

一八六七年の妥協に始まるオーストリア＝ハンガリー二重君主国時代のハンガリー政治の捉え方には、ゲルハルド・ペーテルによれば、二つの対立する立場が存在する。⁽¹⁾ 一方には、妥協は国内の諸民族からもハンガリー語話者

の多数派からも支持されなかったために、比較的狭隘なままに保たれた有権者層の間での公開投票を前提に、自由党政権（一八七五～一九〇五年）の下で制度化されていく腐敗・選挙干渉によってしか支えられなかったとするゲラー・アンドラーシユの主張がある。⁽²⁾ ゲラーは、選挙地理上「馬蹄」形に分布する（少数民族政党が選挙ポイコット戦術をとっていたために、政府支持派候補者の金城湯池となっていた）少数民族居住地域の与党の支持基盤とハンガリー語話者の居住する中央部の野党支持の「軸」との間に存在するであろう浮動票地域が、とりわけこうした腐敗や選挙干渉の温床になったという、一見すると魅力的に見える仮説を提示した。⁽³⁾ 他方で、サボー・ダーニエルはゲラーに反論して、自由党政権期には（自由党が分裂して臨んで敗北を喫した一九〇五年選挙を除くと）過半数の選挙区で候補を立てた野党は存在しなかったことから、選挙で勝利する可能性が一つの政党にしかないヘゲモニー政党制が存在したと指摘し、「金銭とか、当局との間の、あるいは経済的な従属関係とかが、最終的な勝利を決した総選挙は、当該時期には存在しなかった」と主張した。⁽⁴⁾ ツィーゲル・アンドラーシユもサボーに与して、選挙腐敗は妥協以前に遡る、あるいは戦間期にも残った現象であり、同時代の西欧諸国でも見られたことから、妥協体制の維持がその要因であったとは限らないことを指摘した。ツィーゲルは、ゲラーの選挙地理上の仮説を、選挙結果に異議が申し立てられた選挙区の地理上の分布を調べることで検証し、ゲラーの提示した仮説を否定している。⁽⁵⁾

二重君主国期ハンガリーの政治体制を論じる場合には、同時代の論争にも考慮を払うべきだろう。一九〇五年から〇六年にかけて、『ブダペシュト・レビュー』誌でハンガリーにおける責任内閣制の未成立を説いた、ブダペシュト大学法学部で政治学講座を担当していたコンチャ・ジェーゼーと、彼に反論し、のちに『ハンガリーにおける議院内閣制』（一九一二年）を著すことになるデアーク・アルベルトの間で戦わされた論争のことである。⁽⁶⁾ コンチャは、改革期における議論の中で責任内閣制を主張したのは教条主義的な中央集権派のみだったことを指摘し、内閣

の責任制を定めた一八四八年第三号法において規定された「独立した責任ある政府」の強調点はむしろ「独立した」に置かれていたと主張し、この法律が内閣の政治的責任制に道を拓く条項を含んでいることは認めながらも、基本的には法的責任制を確立した（副署大臣の違法行為を訴追・弾劾できる）に過ぎないと見做した。コンチャによれば、そもそも君主の大臣任免権が存在する限り議院内閣制は法的にサンクシヨンし得るものではなく、コンチャは、それは道義的に、実践の上で成立する慣習であると主張し、ハンガリーではこの慣習が、適切な政党システムの発達を欠いたために成立していない、という立場をとった。これに対して、デアーク・アルベルトは、コンチャ自身が認めているように、「責任内閣」の要求は改革期末には議会反対派の綱領に取り入れられており、一八四八年第三号法は内閣の法的責任制の規定の他に、政治的責任制をも可能にする条項を備えていること（予算・決算の年次提出義務、大臣の議会への出席・応答・文書開示義務、等）、それが法制定者の意図でもあったことを強調し、にもかかわらず議院内閣制が実現していないことの要因は、政権を担い得る綱領を備えた二大政党による政権交代が実現しなかったことに求めた。⁽⁷⁾ この論争が、選挙に勝利した議会多数派と国王の対立を背景に議会外内閣が任命された一九〇五〇六年の憲法危機を背景としていたことは言うまでもない。

二重君主国期のハンガリーの政治発展を考察する際には、選挙権の幅に大きな変動がなかったことから、主としてこの政府の（政治的）責任制がどのような変遷を辿ったのかを検討する必要があるだろう。⁽⁸⁾ 実際にこれを試みた政治学者もいる。⁽⁹⁾ ただし、ヴィーネル・ジェルジの論文は、先に引用したデアーク・アルベルトが執筆した二〇世紀初頭の著書などを典拠としており、ここではより最近の政治史研究の成果にも依拠して検証しよう。検討するのは、各内閣の倒閣の原因、後継内閣の組閣に際しての首班指名のイニシアティヴ、君主の果たした役割などだが、とりわけ組閣交渉は（謁見した者が日記などをつけない限り）文書での史料が残らない国王との謁見の場で進められて

おり(君主の許可なく謁見の内容を報道機関に漏らすことはタブーとされていた)、詳細が明らかでない場合も少なくないが、可能な限り客観的な記述を試みよう。国王に首相の辞任が一度受け入れられた場合には、後に同じ首相が再任された場合でも、内閣危機として扱う。

一 妥協から党合同を経て

1 一八六七年の妥協と責任内閣制

六七年の妥協に至る交渉に際してハプスブルク帝国皇帝Ⅱハンガリー国王フェレンツ・ヨーゼフ(フランツ・ヨーゼフ)が最も強く抵抗したのが、前皇帝Ⅱ国王が一八四八年四月に裁可したハンガリー政府の責任制を復活させることであつた。⁽¹⁰⁾他方で、ハンガリー議会の実質的な指導者であつた(六一年議会でも、六五年召集議会においても、議会開会時の玉座演説 *trónbeszéd* に返答する下院の上申文書 *felirat* 作成を主導した)デアーク・フェレンツが譲ろうとしなかったのもこの点であつた。妥協へ向けた試みは六〇〜六一年に挫折したのちに、六五年に再開されていたが、六六年の普墺戦争における敗北を経て、対プロイセン報復を最優先する前ザクセン王国外相F・F・ボイストのハプスブルク帝国外相就任を俟って初めて、妥協交渉においてオーストリアⅡハンガリーの二重制とハンガリーの責任政府とを容認する道が開かれるのである。⁽¹¹⁾しかしながら、六七年に若干の(些末とは言えない)修正を施した上で復活した一八四八年第三号法に規定されたハンガリー政府の責任制は、議会(多数派)に対してのみでなく、首相・大臣の任免権を有する国王に対しても政府が責任を負う、従つて議会多数派の信任のみでなく、国王の信任

をも必要とする、二重の責任制を含意するものであった。

(1) 一八四八年四月諸法と一八六七年妥協における責任内閣制

一八四八年革命勃発の最中で、当時のポジョニ（現在のブラチスラヴァ）で開催されていたハンガリー議会（身分制議会）で三月に相次いで可決され、四月一日に国王フェルディナンド五世（皇帝としてはフェルディナント一世）の裁可を得た、いわゆる四月諸法の中で、責任内閣制を規定した第三号法（と、選挙法を定めた第五号法）は、議会上院の書記を務めていたギツイ・カールマーンが、下院反対派のリーダーであるコシュート・ラヨシュの依頼で起草したものである。⁽¹²⁾ ギツイは、主として当時的大陸ヨーロッパでモデル憲法と目されていたベルギーの一八三一年憲法や、フランスの一連の憲法・憲章、ドイツの諸領邦の憲法などを参考にしたと考えられている。一八四八年第三号法は、第三条で「陛下は……執行権を、法律の趣旨において、独立のハンガリー内閣を通して行使し、あらゆる政令・命令・決定・任命はブダペシュトに所在する大臣の一人によって副署された場合にのみ有効である」と、大臣の副署義務を定めた上で、第四条で「内閣のすべての構成員は、あらゆる職務上の行為に対して責任を負う」と定め、不可侵の国王（第一条）に代わって副署した大臣が責任を負うという構成をとっている。⁽¹³⁾ 同法では、執行権の範囲、内閣の構成と任命関係、閣議、既存の官庁との関係が列挙された後に、議会との関係が触れられ、「大臣は国会の各議院に座席を有し、発言を望めば、聞かれるべきである」（第二八条）、「大臣は国会の各議院において、その希望に応じて出席し、望まれた説明を行う必要がある」（第二九条）、「大臣は公文書を、国会の各議院の要望に応じて、その議院自体、またはその議院によって任命された派遣団に対して、調査のために提出する義務を負う」（第三〇条）と規定された。この後に政府の法的責任制に関する、コシュートが起草した条文が続き

(第三二・三六条)、大臣が、違法行為、公金横領、法律執行や公秩序維持における不作為を根拠として、下院の過半数の提訴で、上院から選出される法廷において弾劾されることが詳細に規定されている。同法の最後は、議会上院への年次予算・決算提出義務の規定(第三七条)と、給与に関する暫定措置(第三八条)で締め括られる⁽¹⁴⁾。従って、同法は、法的責任制を明確に定めている他に、当時の大陸ヨーロッパで知られていた諸憲法を範として、比較的広範な政治的責任制をごく曖昧に規定し、二〇世紀の諸憲法に見られるような内閣不信任制度の規定は備えていなかったことになる。

他方で、法律の制定者たちがイギリスの国制上の慣行を踏まえて、議会の多数派が政府を構成することを前提として議論していたことも知られている。一八四八年三月に議会が国王に提出した上申文書では、政府は「多数決という憲法原理に相応しい、発露 *felétől kinyilvánítás*」(強調引用者)たるべきであり、従って既存の統治制度を「ハンガリーの責任政府 *felelős ministerium* に再編すること」を、すべての改革の根本的条件にして本質的保障と我々は見做して」(強調引用者)おり、「自由で立憲的な国においては、立法権と執行権とは緊密に調和していなければならぬ。両権は、国民の多数派の意思の発露である人々によってしか行使できない」と述べられている⁽¹⁵⁾。法案の(上院での)審議に際しては、反対派(自由主義派)のテレキ・ラースローが「下院多数派と共に統治するか、あるいは辞任するかである」と発言すれば、保守派のセーチェン・アンタルは「事態の自然な成り行きとして、最終的には、多数派なしで立憲的には統治できないのでありますが、これを内閣に多数派がなければ即座に辞任すべしと解すべきではありません。なぜなら、これは助言者を自由に選択できる王位 *Korona* の権利と矛盾するからであります、この場合には国民に訴えるのが権利であり義務であります」と釘を刺していた⁽¹⁶⁾。

一八六七年の妥協交渉に際しても、問題となったのはこの点であり、国王・保守派が四月諸法に対して修正を要

求したのは、まず大臣の任命権であり、そして国王の議会解散権に対する制約の緩和であった。一八四八年第三号法が首相の任命権を国王に認めながら、大臣の選任権を首相に、国王にはそれを確認する権限しか認めていなかったのに対して、六七年の妥協に際して、首相と大臣の任命権は明示的に国王の権限とされた（一八六七年第八号法⁽¹⁷⁾）。また、四八年四月諸法の中で、議会の毎年開催を規定した第四号法では、翌年の予算を可決する前に議会を停会・解散することが禁じられていたのに対して、六七年には、予算可決前に議会を解散・延期・停会する場合には年内に予算が可決できるように国会を再召集することと規定され（一八六七年第一〇号法⁽¹⁹⁾）、国王の議会解散権に対する制約が緩和されたのである。これらは、妥協法（一八六七年第二二号法）に先立って可決された、一八四八年四月諸法に対する四つの修正法の内の二つを構成した⁽²⁰⁾。

(2) 二重の責任制とその運用をめぐる

一八六七年の妥協以後の二重君主国期のハンガリーにおいて、首相・大臣の任免権は国王に属し、他方で政府は議会多数派の支持を必要としていた⁽²¹⁾。首相指名選挙 investiture に関する法規定はないため、政府の成立に議会の信任投票は必要とされなかったが、議会多数派の支持を失えば、政府は辞任するか、議会を解散して総選挙に訴えるしかない、というイギリスの政治慣行がハンガリーの政治家の常識にもなっていた⁽²²⁾。他方で、一八六七年の第二次選挙権改革以降のイギリスにおいては、君主の首相任命権が形骸化していき、女王の好みとは関係なしに選挙結果に基づいて政権担当者が決まったのに対して、ハンガリーにおいては、首相の任免権という国王大権は実質を失わなかった。首相は議会多数派の信任だけでなく国王の信任をも必要としており、政府は議会（多数派）にも国王にも責任を負っていた⁽²³⁾。国王が組閣を委任した首相候補者が議会多数派の支持を取りつけられなかった場合には、

首相候補者は組閣を辞退せざるを得なかったし（二八九四年五月末～六月初めの第一次ヴェケルレ・シャーンドル内閣辞任後にクエン・ヘーデルヴァーリ・カローイが、一九〇三年のセール・カールマーン内閣辞任後にティサ・イシュトヴァーンが、自由党の支持を得られなかった事例）、議会多数派の支持する首相が国王の信任を失った場合にも、首相は辞任に追い込まれた（二八九四年末の第二次ヴェケルレ内閣の辞任の事例）。この議会多数派と国王の間の権力のバランスは、半世紀に及ぶ二重君主国期ハンガリーの歴史の中でどのように変遷したのだろうか。

2 デアーク党政権期の歴代内閣

一八六七年二月にアンドラーシ・ジュラが責任内閣を組閣した時、ハンガリー議会では、右派とも呼ばれた「デアーク党」が多数派を占め、政権与党の座にあった。野党の左派は、翌年までには、その大部分を占める、より穏健な「中道左派」と、少数派の「最左派」とに分裂した。⁽²⁴⁾ 政党（議会内での会派と、議会外におけるクラブとからなる）の相違は、成立した妥協に対する態度の相違を反映していた。デアーク・フェレンツの承認のもとで、ハンガリー側をアンドラーシ・ジュラ、ローニャイ・メニュヘルト、エトヴェシュ・ヨージェフが主導した妥協交渉の成果を、デアーク党は国王から現時点で獲得しうる国制上の最大限の譲歩と見做し、これを支持した。⁽²⁵⁾ ティサ・カールマーン、ギツイ・カールマーンの二人をリーダーとする中道左派は共通業務（軍事、外交、等）の存在は認めていたが、これを妥協法に定められた一連の共通制度（共通／帝国内閣、派遣団、共通軍、等）で運用することに反対しており、国王からもっと大きな譲歩を引き出せると考えていた。⁽²⁶⁾ 最左派は、そもそも共通業務の存在を認めない立場だった。⁽²⁷⁾

諸政党の分岐は、保守主義と自由主義という当時の主要なイデオロギー上の立場の相違と対応していなかった。デアーク党は、多数派は自由主義派だったが、シエンニエイ・パールをリーダーとする保守派を内部に抱えていた。⁽²⁸⁾ 後者は上院の多数派をなしており（国王を初めとして、宮廷もこの立場だったため）、決して侮れない政治勢力であった。中道左派は、基本的に自由主義派であり、ティサラ党指導部がまとめた一八六七年六月の党綱領は、国制上の要求を殆ど含まない、自由主義的改革を列挙したもので、政権獲得を目指した内容だったが、党内には国制上の要求を掲げて最左派に接近するグループがあり、党分裂を避けるために翌年春にまとめられた、いわゆるビハル綱領では、妥協法に反対する国制上の立場が再確認された。⁽²⁹⁾ だが、六七年の妥協を認めない限り、国王は中道左派を政権に参加させることはなかった。

(1) アンドラシー・ジュラ（父）内閣からローニヤイ・メニユヘルト内閣危機まで

デアーク・フェレンツが閣僚ポストを引き受けようとしなかったことから、デアーク党政権は党の指導者が閣外に留まるという特殊な状況に置かれた。⁽³⁰⁾ デアークは一八六六年七月の謁見において既に責任内閣の首班にアンドラシー・ジュラを推薦しており、六七年一月に妥協交渉が本格的に進捗し始めると、閣僚メンバーについても交渉グループ（アンドラシー、ローニヤイ、エトヴェシュ）との間で協議を行った。このような過程を経て、二月一七日にアンドラシーが首相に任命され、アンドラシーの提示した閣僚名簿に従って二〇日に国王が大臣を任命した。⁽³¹⁾ ローニヤイが大蔵大臣、エトヴェシュが宗教・公教育大臣を引き受けたが、デアークのみでなく、デアークの個人的な信奉者たちからなるデアーク党の中核グループ *NOH* の指導者であるチェンゲリ・アンタルも閣僚を引き受けなかった。⁽³²⁾

アンドラーシ内閣は、一八六七年妥協に基づく二重君主国体制の構築（トランシルヴァニアとの議会合同、六八年のクロアチアとの妥協⁽³³⁾、軍政国境地帯の民政移管⁽³⁴⁾、県自治体の身分制地方議会からの改編、防衛力法⁽³⁵⁾、アンドラーシ自身が兼任した国防大臣の下でのハンガリー国防省の設立、等）を進める一方で、国内の自由主義的改革を担当したエトヴェシュの下で、初等教育法の制定⁽³⁷⁾、ユダヤ教徒の市民的・政治的同権化⁽³⁸⁾、民族的同権法の法制化、教会自治組織の整備などが進められたが、エトヴェシュら自由主義派のデアーク党閣僚は、国内改革では何度も挫折を味わうことになった⁽³⁹⁾。最左派が地方で扇動した妥協に反対する団体（「民主サークル」）の設立を阻止するための内務省令（一八六八年）は、集会・結社の権利の法的整備が行われずに政令による規制が常態化するきつかけとなったものだが、法務大臣ホルヴァート・ボルディジャールとデアーク自身が起草を余儀なくされたものであった⁽⁴⁰⁾。エトヴェシュ文相は信仰の自由と義務的民事婚の導入を企図したが、国王の反対にあつて（事前裁可権を用いて、特に後者を拒否した）実現しなかった⁽⁴¹⁾。六八年に導入されたキリスト教の複数宗派間での婚姻に関する規定（息子が父親の、娘が母親の宗派を引き継ぐ）もエトヴェシュの意図したものではなかった⁽⁴²⁾。これらの積み残した課題は、九〇年代前半に教会政策論争を引き起こすことになる。自由主義的改革が不徹底に終わった背景には、六九年選挙で固定化した政党システムによって、与党が保守派を抱え、自由主義派の重要な部分が野党に座を占めていたという事情もあった⁽⁴³⁾。

アンドラーシ内閣の顔ぶれでは、一八七〇年五月にローニヤイが閣内対立から蔵相を辞任して共通財務大臣に転出し（後任の蔵相はケルカーポイ・カローイ）、七一年二月にはエトヴェシュが亡くなり（後任の文相はパウレル・ティヴァダル）、ホルヴァート法相の後任にビットロー・イシュトヴァーン、ゴロヴェ・イシュトヴァーン農・工・商務大臣の後任にスラーヴィ・ヨージェフが就任し、一線級の大臣は退いて、アンドラーシと権威を争える人物は閣内に居なくなつていった⁽⁴⁵⁾。

一八七一年一月に、ボイスト共通外相・帝国宰相に代わって、アンドラーシが共通外相に就任した際⁽⁴⁶⁾、アンドラーシの後継首班にはローニヤイ・メニユヘルトが、共通財務相を辞任して就いた⁽⁴⁷⁾。アンドラーシはこれに強く抵抗しており、エトヴェシュの生前は彼に後継を打診して断られ⁽⁴⁸⁾、彼の死後はスラーヴィ⁽⁴⁹⁾、あるいは年長の閣僚としてヴェンクハイム・ペーラ内大臣を推したが、いずれも実現しなかった。更に、ローニヤイのコンスタンチノーブル大使への転出などを画策するが、これも果たせなかった⁽⁵⁰⁾。結局、首相以外の閣僚の留任を条件としてローニヤイの首相就任に同意したとみられる⁽⁵¹⁾。デアークはローニヤイの首相就任に反対しなかったが、強く推した形跡もなく、一年後にローニヤイが辞任に追い込まれた際にも擁護していないことから、ローニヤイはデアークの候補でもなかったと思われる。ローニヤイは国王の信任を受けて首相に就いたのである⁽⁵²⁾⁽⁵³⁾。

ローニヤイは、上から、国家主導で自由主義的改革を進めようとする、権力に就いた自由主義の時代の政治家であり⁽⁵⁴⁾（この点で、国家からの自由を重視する、運動としての自由主義の時代の政治家であるデアークやエトヴェシュとは志向が異なる）、立憲制や自由よりも統治の効率性を優先し、その政治手法は野党からは強権的⁽⁵⁴⁾と見做された。彼の首相就任は、前内閣から引き継いだ（その後もアンドラーシと頻繁に連絡を取り続ける）閣僚の不信に迎えられ、後に、与党との連携を強化しようと党指導部からの入閣をチェンゲリに求めた際にも、党指導部と国王（すなわち、その助言者アンドラーシ）は最小限の内閣改造しか認めなかった⁽⁵⁵⁾。

一八七二年選挙を目前にして政府が選挙法改正案（三年任期に代わる五年任期の導入を含む）を持ち出したことは野党の猜疑心を煽り、野党はハンガリー憲政史上初めて議事妨害に訴えた。野党は、選挙法改革よりも先に、議員と官吏の兼職禁止や選挙結果に対する異議申し立て制度の議会からの独立（議会委員会の所管から最高裁判所の所管への移管）を実現することを要求したが、ローニヤイは議会の開催時間の倍加や、議事妨害を防止するための議院規則

改正案で応酬し、最左派のみならず中道左派までもが議事妨害に参加したため、結局、選挙法改正は断念せざるを得なかった。ローニヤイは七年選挙において、与党内に自分の支持者からなる派閥を創出することを目指して積極的に選挙介入して、⁽⁵⁷⁾野党の怒りの火に油を注ぎ、選挙後の議会での野党の政府攻撃は首相への個人攻撃の様相を呈し始めた。七年十一月に議場での野党議員からの（権力の座にある間に私腹を肥やしているという）中傷に、首相が（当該野党議員の新絶対主義期秘密警察との関係を示唆する）中傷で応じたことが契機となつて、閣僚・党指導部は、ローニヤイが首相を務めている限り政府と野党との関係は修復せず、統治可能性を確保するためには首相の交代が必要だという結論に至つた。⁽⁵⁸⁾閣僚たちは後継内閣の組閣交渉に着手し、デアークにも見限られたローニヤイはかうして形式的に全閣僚の辞任を取り付けるが、ローニヤイ以外の閣僚は全員が後継のスラーヴィを首班とする内閣に参加していたのである。⁽⁵⁹⁾

(2) スラーヴィ・ヨージェフ内閣から同内閣危機を経てビットー・イシュトヴァーン・ギツイ・カールマーン内閣まで

ローニヤイの後継にスラーヴィ・ヨージェフ商務相を推したのはデアークとみられ、アンドラーシも賛成して一八七二年一二月に後継内閣が組閣された。⁽⁶⁰⁾新任の大臣は空席となつた商務相とそれまで首相が兼任していた国防相だけという、最小限の閣僚交代であつた。⁽⁶¹⁾デアーク党政権末期の内閣では、首相は同輩中の首席を占めたに過ぎず、党指導部の有力者が入閣していないことも変わらなかつた。⁽⁶²⁾

デアーク党は複数の派閥に分裂していき（デアーク自身は病に伏せがちだった）、⁽⁶³⁾一八七三年の金融恐慌を受けてハンガリー政府が財政破綻の危機に瀕する中で、⁽⁶⁴⁾デアーク党政権は求心力を失つていった。⁽⁶⁵⁾とりわけ、シェンニエ

率いる保守派と、ローニヤイの個人的な支持者たち（毎週火曜に会食を共にしたことから「夕食党」*Yasor-pati*）と通称された）とは党規律に服さず、（杜撰な財政運営で国家の信用喪失を招いた）ケルカーポイ蔵相を公然と罵倒したり、重要な投票で棄権（欠席）や政府に反対票を投じるような行動をとった。⁽⁶⁶⁾ 七四年二月に、経営破綻した東部鉄道の救済案で政府支持が過半数を割りそうになり、スラーヴィは二月末にウィーンに赴いて内閣総辞職する意向を国王に伝えるが、国王はスラーヴィに中道左派との連合政権交渉を委ね、三月に入ってブダペシュトに戻ったスラーヴィによって連合交渉が開始された。⁽⁶⁸⁾

与党が派閥化するのと並行して、実は野党中道左派も分裂の危機を迎えていた。中道左派は一八六九年選挙でも七二年選挙でも多数派を獲得できず、選挙では政権に到達できないことが明らかとなっていた。⁽⁶⁹⁾ 当初、六七年の妥協の実践可能性に疑念を抱いていたに過ぎなかったギツイは、ビハル綱領には反対の立場であり、七二年選挙後の九月の党会合では、（独立の中央銀行の要求などは維持したが）国制上の対立を大部分棚上げしてデアーク党との合同を訴える発言をしていた。ギツイは、深刻な財政危機を背景として、七三年一月の党会合で再度党合同の必要性を訴えて、これが党内の多数派に受け入れられないと、離党して、意見を同じくする者たちと、三〇名の議員からなる小規模な中央党を設立した。⁽⁷⁰⁾ 他方で、国制上の立場を維持したままで連合には応じる用意があるとするティサら党主流派の立場に反発した党内左派は、「原理的中道左派」を名乗って最左派に合同する動きを見せていた。⁽⁷¹⁾ 政党システムが流動化する中で、一方には、保守主義・自由主義を対抗軸とする政党再編を目指す立場と、他方には、国制上の対立に基づくそれを目指す立場とが存在した。⁽⁷³⁾

スラーヴィは連合交渉に際して国王をブダに呼び寄せ、国王はティサを謁見に呼び、スラーヴィ、ティサ、ギツイ、そしてペシュトを訪れたアンドラーシの間で協議が進められた。国王はティサが妥協法を維持することを明言

することを望んだが、ティサは妥協法の修正を求める中道左派の立場を（同意が必要なハンガリー国会、帝国議会、皇帝の三つのファクターの内、一つとして同意していない状況で、実質的に実現は不可能であることを認めた上で、原則としては）維持し、あくまで時機を見て修正を提起する行動の自由を諦めようとしなかったことから、交渉は頓挫した。⁽⁷⁴⁾ ティサは、妥協法の修正にこだわる限り政権には到達できないことを知ったのである。連合政権交渉がまとまる見込みが固まる前に交渉の場に呼び出されたことで、国王はスラーヴィイに対する組閣委任を取り下げた。⁽⁷⁵⁾

一八七四年三月下旬に成立した後継内閣の首班には、スラーヴィイの組閣交渉が失敗した場合にとデアークが推薦していた下院議長ビット・イシュトヴァーンが就いた。⁽⁷⁶⁾ 内閣危機に先立って前年末に辞任していたケルカーポイの後任蔵相（蔵相は、東部鉄道のスキヤンタルの責任を取った公共事業・交通大臣ティサ・ラヨシュ——ティサ・カールマインの弟はデアーク党だった——と共に辞任し、首相が臨時に兼任していた）は誰も引き受けようとしなかったが、アンドラーシの推薦で、謁見の場で国王の強い要請を受けてギツイ・カールマインが引き受けることになった。⁽⁷⁷⁾ ギツイの他に新たに入閣したのはバルタル・ジェルジ商務相だけで（ジチイ・ヨージェフ前商務相が運輸相に横滑りした）、他は前内閣の閣僚を引き継いだ。ビット内閣はデアーク党と中央党の連合政権ではなく、中央党は二大政党の合同という所期の目的を果たすために独立を維持した。⁽⁷⁸⁾

ビット内閣の下で一八四八年の選挙法（第五号法、およびトランシルヴァニアの第二号法）が修正され、新たな選挙法が制定された。一八七四年選挙法（第三号法）は、土地の面積や家屋の価格などを選挙権資格要件に定めていた四八年の規定を、それに相当する租税の納付に書き換えたもので、本質的にはローニヤイが七二年に試みたと変わらない（五年任期の導入は、今回は断念した）。⁽⁷⁹⁾ 選挙前に十分な時間をもって議会に上程されたことと、官吏の議員兼職を禁ずる議員兼職禁止法案が議会に上程されたこと（実際に、一八七五年第一号法として成立する）、⁽⁸⁰⁾ 選挙

結果への異議申し立てが原則としては最高裁判所の所管とされたこと（第八九条、但し別個の法律での規定が必要とされており、これは一八九九年まで実現しない）などが、おそらく今回は野党の激しい反発を回避できた理由だろう。実際には、租税滞納者が選挙権を否定されたことで、有権者は若干の減少を示した（この規定は一八九九年に廃止される）。

財政危機の中で、直接税の増税を含む一八七五年予算案は、デアーク党内からもシェンニエイ派やローニヤイ派の反対を受けて、成立が危ぶまれていた。⁽⁸¹⁾ 七五年一月下旬にアンドラーシはティサを訪ねて、六七年の妥協の受け入れと党合同の必要性を説得した。⁽⁸²⁾ ティサは二月三日の議会の予算審議で発言に立ち、この発言が党合同の契機となる。⁽⁸³⁾ ティサは、まず政府の予算案を批判した上で、次いで政党の状況に立ち入る前に、前提として二重君主国の共通業務を幾つかに分類することから始めた。最初に、一八六七年第一二号法は時限立法でなく、変更にはオーストリア側の議会を含め、複数のファクターの同意が必要となることを指摘し、次いで、時限立法である（二〇年ごとの改定が予定されていた）共通予算の負担割合（いわゆるクォータ）、通商・関税同盟、防衛力法（軍の規模が定められている）を列挙し、この他に、帝国の負債返済に際しての負担を挙げて、最後に、共通業務には属さない中央銀行（この時点では、オーストリア国民銀行）の問題に触れた。その際に、一八六七年第一二号法の変更は喫緊の課題ではないこと（共通予算への貢献が、財政危機の原因ではないこと）を確認してから、政党の問題に立ち入り、政党の分岐が主として一八六七年第一二号法に対する立場によっていることを指摘した上で、自分自身の想定は、野党が選挙で多数派を取ること、それまでは現在の多数派が国を物質的・精神的に豊かにすることだったが、そのどちらも実現しなかった、と述べた。彼によれば問題は、それぞれの党内で、現在は協議・解決できない問題、実践上緊急でない問題では立場が一致するが、（主として、我々ではなく、多数派の側で、と付け加えた上で）現在議題に上っている、

喫緊の課題で一致しないことだと指摘した。現在の喫緊の課題として、財政赤字の削減に行政改革をあげた上で、鉄道政策、関税・通商同盟の改善点(関税同盟は維持した上で、関税・間接税に改善すべき点があると主張した)、中央銀行問題の解決(交渉を優先するが、独立の中央銀行設立が望ましいと述べた)などを列挙し、将来の問題ではなく、現時点での喫緊の課題に基づく多数派形成を訴えた。

このティサの発言は党合同への意欲を示したものと理解され、中央党は解党して中道左派に復帰した。⁽⁸⁴⁾ ビットー内閣は、党合同とそれに基づく新内閣に道を拓くために辞任を決意した。⁽⁸⁵⁾ ビットーは予算の第一読会での可決を俟って議会審議を中断し、政党情勢の変化を理由に国王に内閣危機を申告することとなった。⁽⁸⁶⁾

3 一八七五年の党合同からティサ・カールマーン内閣まで

一八七五年三月初めのデアーク党と中道左派の党合同によって「自由党」が成立する。デアーク党内の保守派の一部は離党して、シェンニエイをリーダーとして「右派野党」を名乗ることになる。⁽⁸⁷⁾ 他方で、中道左派内の左派の一部と最左派との間の合同交渉は、最左派内の分裂などを経た上で、小規模な「独立党」⁽⁸⁸⁾の設立に至っていた。政党の再編が、自由主義対保守主義というイデオロギー対立と国制上の対立との内で、どちらに沿って進行することになるのかは、この時点ではまだ分からなかった。

(1) 一八七五年の党合同とヴェンクハイム・ベラーティサ・カールマーン内閣の成立

一八七五年二月半ばにビットーはウィーンで国王に辞任を伝え、ティサがウィーンに呼ばれた。ティサはこれに

先立つて、ローニヤイやシエンニエイと個別に会って組閣交渉を行っていたが、謁見に先立つてティサに会ったアンドラーシは、特にシエンニエイの入閣に反対の意向を伝えていた。⁽⁸⁹⁾謁見の場で、ティサは国王に好印象を与えることに成功する。国王はビットーに對して、首班をデアーク党から輩出すること、ローニヤイとシエンニエイは排除すること、両党首脳の間で党合同に支障をきたすような見解の相違がないか確認することを条件に付けた上で、ティサの入閣交渉を委任した。⁽⁹⁰⁾ビットーはブダペシュトに戻ると、チェンゲリを訪ね、両党首脳間の会合を取りまとめた。双方の間では、直接税増税をめぐる対立が残ったが、それ以外の点では合意し、政党合同の機運が高まったとして、ビットーは国王をブダに呼び寄せた。⁽⁹¹⁾しかし、この時点ではまだ首班候補が決まっておらず、財政危機を背景に首班探しは難航した。デアークの推したゴロヴェには国王が反対し、最終的にアンドラーシが推したヴェンクハイム・ペーラ内大臣が首相を引き受けることになった。⁽⁹²⁾二月下旬、ヴェンクハイムは組閣交渉に臨み、ティサがシエンニエイの入閣を要請すると、これに反対する国王が仲介に乗り出した。国王はティサとの謁見で、ティサがシエンニエイの入閣にはこだわらないことを見て取り、むしろ直接税増税への反対の方を問題視して、ヴェンクハイムに両党間で再度協議することを指示した。両党間の会合では、中道左派が七五年中の直接税増税反対の立場を譲らなかつたが、閣僚名簿では合意し、最後に少数が残った中で、ティサが七六年の増税には反対しないことを明言して合意が成立した。⁽⁹³⁾三月一日に、デアーク党、中道左派それぞれの党会合で合同が伝えられ、デアーク党側ではシエンニエイが反対、ローニヤイは自身は参加しないが自派のメンバーには参加を許可し、デアーク党の党クラブが置かれていたロイド宮（ドロツチャ通り、科学アカデミーの向いにあった建物）で「国会自由党サークル」が設立された（サークル名簿の首位には、病床に臥せていたデアークが署名した）。翌日には、シエンニエイが三八名の議員からなる「右派野党」を結党した（党クラブは、それまで中道左派が使っていたカルヴァン広場の貯蓄金庫宮に置か

れた。⁽⁹⁴⁾ 七三年末からの中道左派の分裂の過程で最左派に接近した部分は、七四年四月に（最左派内で「四八年党」に留まった少数を除いて）「合同国制野党」に合流し、この党はコシュートの指示で「独立党」を名乗ることになる。⁽⁹⁵⁾ 右派野党が三八名、最左派の独立党が四〇名程度、四八年党が六名という規模を考慮すると、巨大な与党の成立であつた。

三月二日に成立したヴェンクハイム内閣では、セール・カールマーンが蔵相を務め、田中道左派からは、内相にティサ・カールマーン、商務相にシモニ・ラヨシュ、運輸相にペーチ・タマーシユの三名が入閣し、この他の閣僚の交代は法相（パウレル・ティヴァダルから下院議長を務めていたベルツェル・ベーラに、下院議長にはギツィが選出された）だけであつた（ヴェンクハイムは内大臣を兼任した）。ヴェンクハイム内閣は、一八七五年予算を成立させると、増税が実現しなかつたために財源が不足する分はギツィ前蔵相の獲得した融資でカヴァーすることとして、翌七六年予算案からセールが財政再建に取り組むことになった。七五年七月の総選挙では、自由党が三三三議席、右派野党が二一議席、独立党が三十六議席を占めた（総議席四一三）。ヴェンクハイムは、ティサが首相を務めることへの宫廷の不安を払拭することに努め、一〇月二二日、ティサを後任として首相を辞任した（内大臣として閣内には留まつた）。⁽⁹⁷⁾

(2) ティサ・カールマーン内閣期の内閣危機

第一次ティサ・カールマーン内閣は前内閣の閣僚を全員引き継いで成立した（内府兼務首相だったヴェンクハイムに代わって、ティサが内相兼務首相）。ティサ内閣は、自由主義的な改革では大きな成果を上げることができなかった一方で、関税・間接税に関わる経済妥協の改定交渉と中央銀行問題に積極的に取り組み、オーストリア側（政府、国

民銀行)に大きな譲歩を要求した。⁽⁹⁸⁾

一八六七―七八年の妥協交渉においては殆ど触れられなかった(オーストリア国民銀行が、七六年まで有効な独占的
発券銀行の特許を有していた)中央銀行問題が、七六―七八年の経済妥協交渉の中心テーマとなった。ティサは、共
通関税圈に関わる問題でオーストリア側に譲歩を求められると、⁽⁹⁹⁾見返りに中央銀行問題での譲歩を要求した。六七
年の妥協法には通貨と公定歩合の共通性についての規定しか存在せず(第二号法第六六条)、独立の中央銀行設立
は妥協法に抵触しなかったから、右派野党のアポニ・アルベルト曰く、「中道左派はこの一点のみを――彼らの主
義が座礁した中から――党合同の中へ救出したのである」⁽¹⁰⁰⁾。但し、独立の中央銀行の設立は、当時の状況では現実
的でなかったことから、⁽¹⁰¹⁾ティサは譲歩を引き出すための手段としてこれを取り上げ、更には自らの辞任をも戦術的
に用いて、オーストリア側政府や皇帝Ⅱ国王から譲歩を引き出し、オーストリア国民銀行に圧力をかけた。ハンガ
リー政府の構想はカルテル銀行(同一の株式会社が、個別の資本金と経営陣を持つ二つの銀行をウィーンとブダペシュトに
設立する)というものだったが、七六年五月の共通閣議でオーストリア側政府が同意したのは、一つの銀行企業が
二つの銀行機関を設立し、パリティに基づく中央組織が監督するという中央銀行の「二重制化」であった。⁽¹⁰²⁾自由党
内からはこれに不満を持った七四人の議員が離党して「独立自由党」⁽¹⁰³⁾を設立した。両政府の合意に反して、ウィー
ン資本の後ろ楯のもとでオーストリア国民銀行は強く抵抗し、七七年一月に、二つの本店は置くものの、株主総会
で選出される総理事会 Generalrath (両副総裁を除くと、一二名中八名がオーストリア側、四名がハンガリーの国籍者)に
決定権を集中した内容の対案を提示した。ティサは、これを交渉の基礎とすることに反対して、独立中央銀行の設
立準備への許可を国王に求めるが、これが国王に拒否されると、二月に首相を辞任したのである。⁽¹⁰⁴⁾ティサは、これ
までの交渉の合意点を維持することを条件に、後任に右派野党のシエンニエイを推すが、シエンニエイは工業保護

関税に反対して引き受けなかった。⁽¹⁰⁵⁾ 結局、ティサが再任され、ティサは各本店を主宰する副総裁の人事と総理事会の構成での譲歩を条件に、辞任した時と同じ陣容で第二次内閣を組閣した。オーストリア＝ハンガリー銀行については、副総裁を（総理事会の推薦する三名の中から）各蔵相の推薦で君主が任命する政治的任命制と、総理事会の他のメンバーのうち二人ずつを各本店執行部が推薦する（一人につき三名の）候補の中から選出する形式的パリティとで妥協が成立した（法文上はパリティだが、実質は二人中二人、もしくは、副総裁を入れると、一四人中三人がハンガリーに確保された）。⁽¹⁰⁶⁾

両政府の間で苦勞して実現した妥協案は、両国の議会で与党内からも強い批判に晒され、今度はオーストリア側の内閣（ドイツ人リベラル派のアドルフ・アウアースベルク内閣）が一度辞任して与党の説得に当たった。一八七八年初頭、ハンガリー議會において、オーストリア側の内閣危機の間、経済妥協法案（関税・通商同盟法案と関税表法案）の審議をストップして、新内閣と再交渉すべきであるという動議が僅か一九票差で否決されると、再び自由党からは離党者が出て、彼らは「無党派自由主義者」と呼ばれた。⁽¹⁰⁸⁾ 七八年二月、経済妥協法案は三六票差で第一読会を通過した。⁽¹⁰⁹⁾ 七五年選挙の圧倒的多数派は、七八年初頭にはここまで小さくなっていた。自由党を離党した独立自由党と無党派自由主義者とは、七八年四月に右派野党と合同し、「合同野党」を名乗るこの党は議員一一五名を数えた。保守派の若手として登場し、後に農業保護主義とナシヨナリズムの擁護者となるアポニ・アルベルトと、自由主義的法制度についての該博な知識をもって議會では手強い論敵として恐れられたシラージ・デジェーの二人が、合同野党の中から党のリーダーとして抬頭してくるようになるが、保守派も自由主義派も内包するこの党は「寄せ集め党 habarekpart」⁽¹¹⁰⁾と揶揄された。

一八七八年八月前半に行われた総選挙は、ボスニア＝ヘルツェゴヴィナ占領の軍事行動の最中に実施され、与党

自由党は多数派を維持した⁽¹¹¹⁾が、与党内外で共通外相アンドラーシの外交政策は批判を招いていた。軍事支出の増加がハンガリーの財政再建を不可能にすると判断したセール蔵相が九月末に辞任し⁽¹¹²⁾、ティサは蔵相を欠いての政權運営は困難と判断して、再度総辞職する⁽¹¹³⁾。国王は、マイラート・ジェルジ上院議長、ギツィ下院議長、合同野党からシェンニエイ、シモニ・ラヨシュ、ビットー（それぞれ、右派野党、独立自由党、無党派自由主義者の指導的政治家）、自由党からスラーヴィを謁見に呼び⁽¹¹⁴⁾、スラーヴィを首班とする自由党と合同野党の連合もしくは党合同に基づく後継内閣の可能性を探ったが、スラーヴィが固辞して実現しなかった。スラーヴィは、アンドラーシと国王が進めた外交・軍事政策を批判する内閣の組閣を躊躇したと言われている⁽¹¹⁵⁾。ティサは一〇月一日に、蔵相を欠いたまま（ティサが兼任し、この間、内相はヴェンクハイムが兼任した）暫定事務管理内閣を率いることとなり、一二月五日になつて漸くサパーリ・ジュラが蔵相を引き受けて（ティサは再び内相を兼任した）、第三次内閣が組閣された⁽¹¹⁶⁾。

ティサ内閣は、自由主義的改革の側面では多くの成果を誇れなかった⁽¹¹⁸⁾。一八八三年になつて議會は（キリスト教徒とユダヤ教徒の間で）民事婚を導入する法案の審議を開始⁽¹¹⁹⁾し、下院はこれを可決したが、上院が二度にわたつて否決したために、これは実現しなかった⁽¹²⁰⁾。ティサは上院改革で上院への政府の影響力を拡大しようとしたが、異宗派間の婚姻（と、そこから生まれる子供の宗派帰属）をめぐる問題は、先述したように、九〇年代前半に教会政策論争を引き起こすことになる。ティサの世代の自由主義者は、改革期のそれと比べて、ナシヨナリズムが強い事にも触れておくべきだろう⁽¹²¹⁾。デアークは、諸民族の文化振興の平等性を求める少数民族議員の意見に耳を傾けたが、ティサ・カールマーンはむしろ、少数民族議員に対して恫喝するような発言を行つて沈黙を強いた⁽¹²²⁾。

一八七八年、八一年、八四年、八七年（八七年召集議會から五年任期になる）と繰り返された総選挙の中で、自由党は常に議會多数派を制した。過半数の選挙区で候補を立てられた野党が無かつたことから、實質的に選挙で勝利す

る可能性は自由党にしかなかった。⁽¹²⁵⁾ ティサは、(兼任した内務大臣の権限で) 県知事に任命したり、(党指導者として) 与党派の安全な選挙区を議員候補に割り振ったりすることで、党内に核となる忠実な支持者を生み出し、彼らは「將軍 *generális*」に従う「マムルーク *mamluk*」と呼ばれた。⁽¹²⁷⁾ ティサは同僚の閣僚には専門家を好み、次官出身の行政官僚や裁判官出身者を運輸(バロシュ・ガール)・大蔵(ヴェケルレ・シャインドル)・法務(ファビニ・テオフィル)大臣に任用した。⁽¹²⁸⁾ 同じく次官出身なのだが、フェイエールヴァーリ・ゲーザだけは、ティサの意向ではなく、国王の希望で実現した(序でに言えば、初めての現役武官)国防相である。⁽¹²⁹⁾ サバリー辞任後に蔵相を兼任したティサを大蔵次官として支えたヴェケルレは、後に初めての平民出身の首相となり、フェイエールヴァーリは自由党内で首相の息子であるティサ・イシュトヴァーンの盟友となるが、ティサ・カールマーン内閣の中では、彼らはいずれも財政・軍事専門家として行動していた。

一八七五年から九〇年まで一五年にわたって権力の座にあったティサの権威を動揺させたのは、八七―八九年に改定時期を迎える妥協の、今回は軍事的側面だった。経済妥協は、ティサ内閣とオーストリア側のエドゥアルト・ターフェ内閣の間で、大きな変更を加えることなく(但し、ドイツ帝国の農業保護関税導入に対応して、農業分野でも緩やかな保護関税が導入された上で)、順調に更新された。問題を引き起こしたのは防衛力法の改定だった。⁽¹³⁰⁾ 六八年、七九年の防衛力法が軍の全体の規模を一〇年にわたって定めていたのに対して、ティサ内閣が八八年末に議会に上程した新法案では、毎年の新兵徴募数が固定して規定されていた(法案第一四条)。これが、毎年の新兵徴募数を可決する国会の権利に抵触し、一〇年ごとの更新を不要にする規定になっていると野党は主張した。また、中等教育修了者に認められていた一年志願兵役による予備役士官制度に対しては、ドイツ語で行われる試験に落第した場合にもう一年の兵役と再試験の規定が盛り込まれたことが、学生たちの反感を買った(同第二五条)。⁽¹³²⁾ 法案には与党内か

らも批判があつたが、ティサは党規律によつて、あるいは内閣総辞職をかけて、法案の可決を要求した。八九年一月から三月末までかかる法案審議に際しては、議会内で政府が野党（独立党、旧合同野党である「穏健野党」）の批判の矢面に立たされ、議会外では大学生と未組織労働者が街頭デモを繰り広げた。⁽¹³²⁾ ティサは、第二読会で法案の第一四条に、同条で規定された新兵徴募数を一〇年間有効とするという文言を書き加えることを余儀なくされた（予備役士官昇進試験に関しては、運用で緩やかな扱いを求める議会決議が付帯された⁽¹³⁴⁾）。「解約通知付きの軍」⁽¹³⁵⁾に不満だった軍部・君主の意向に沿った法案の改定を実現できなかったことで、ティサの権威は大きく損なわれた。この過程で、世論の動向に敏感なアポニは、軍に関わる「国民的要求」（この時点では、ハンガリー語を授業語とする——科目としてのドイツ語教育を含む——士官教育の充実）⁽¹³⁶⁾を持ち出していく。政党システムは再び、独立のハンガリー軍を求める独立党、それよりは穏健だが、共通制度（妥協法の表現では、「全軍の一部をなすハンガリー軍」）に対する国制上の要求を掲げる穏健野党、六七年妥協法の維持を支持する自由党という具合に、国制上の立場で並ぶことになった。穏健野党は九二年選挙で「国民党」を名乗ることになる。

防衛力法論争で与党内での求心力が低下したティサ内閣は、一八八九年六月の内閣改造で政府の再活性化を図るのだが、却つて獅子身中の虫を抱え込むことになる。ティサは、自由党内の保守派を代表するサパーリ・ジュラを農務大臣に迎える一方で、⁽¹³⁷⁾防衛力法論争では政府の論敵として立ちのぼったシラージ・デジエーを法相に就けた。⁽¹³⁸⁾雄弁なシラージを野党席に座らせておくのは危険と判断したからであり、シラージは、前年のトレフォルトの死後に後任の文相となったチャーキ・アルビンと、内閣改造に際して次官から蔵相に昇格したヴェケルレ・シャーンドルと並んで、九〇年代前半の教会政策論争を主導する自由主義派の閣僚となるのだが、シラージは（また、サパーリも）ティサの権威には服さない人物だった。実際に、九〇年二月から三月にかけて、コシュート・ラヨシ

ユの国籍喪失問題と国籍法改定をめぐる閣内で意見が対立した際に⁽¹⁴⁰⁾、シラージとサパーリは、閣内対立を仲介しようとする国王の使者、オルツイ・ベーラ内大臣との協議に際して、ティサと、彼と対立する閣僚との間で、国王が中立の立場をとっていることを確認すると、妥協の姿勢を一切見せずに閣内対立を放置し、ティサの辞任を導き出したのである。⁽¹⁴¹⁾

デアーク党政権から自由党政権前半期にかけての歴代内閣のうち、一八七一年一月に首相が共通外相に転出したアンドラーシ内閣を除くと、七二年末のローニャイ内閣の倒閣は、(首相と野党との対立悪化を背景とした) 首相と与党指導部の対立と閣内不一致とが原因であり、スラーヴィ内閣とビットー内閣の内閣危機は、財政危機を背景として与党デアーク党の統合が揺らいだことを要因としていた。スラーヴィ内閣は、七四年三月の中道左派との連合交渉に失敗して辞任(第二次内閣組閣依頼の返上)を余儀なくされ、ビットー内閣は、七五年二月に党合同交渉に道を拓くために総辞職した。三月一日の党合同に成功した自由党政権のヴェンクハイム内閣は、同年一〇月に首相をティサに譲った際には、内閣危機を経験していない。第一次ティサ・カールマン内閣は、七七年二月、オーストリア側の政府や中央銀行との交渉を有利に運ぶために総辞職し、第二次ティサ内閣は、翌年夏に財政再建と軍事行動が両立できないと蔵相が判断したことを根拠に総辞職した。長期にわたって政権にあった第三次ティサ内閣が九〇年三月に倒閣した原因は、再び閣内不一致であった。この時期の歴代内閣の倒閣の原因は、第一次ティサ内閣の戦術的な総辞職を別とすると、主として(七三〇七八年には財政危機・財政再建を背景として) 与党や閣内をまとめ上げられなかった事(と、ローニャイの場合には、それに加えて野党との関係悪化)にあった。

一連の内閣危機と後継内閣組閣交渉を通観すると、後継首班の選定に(ローニャイの場合に見られるような) 国王が

イニシアティヴをとることは、この時期にはむしろ稀であったことが分かる。後継首班の推薦は、辞任した首相の他、有力政治家（上下両院長、与党の指導的政治家、場合によっては六七年派——一八六七年の妥協法を前提として認める——野党の指導的政治家）の側から行われており、この時期にとりわけ重要な役割を果たしたのが、デアークとアンドラーシであることは、見てきた通りである。スラーヴィ、ビットー、ヴェンクハイムは、いずれもアンドラーシ内閣で閣僚を務めた政治家であり、スラーヴィ、ビットーはデアークが（二重制期初代首相のアンドラーシもデアークが推薦した）、ヴェンクハイムはアンドラーシが後継首班に推薦した。ティサは前首相ヴェンクハイムとアンドラーシの推薦だった。国王はこれらの内閣危機に際して、ブダに来て危機の解消と次期首班の選定にあたる協議を直接指揮したが、この時期には国王自身は概ね交渉の仲介役を務めていたに過ぎないと言ってよい（デアークがビットーの後任に推薦したゴロヴェを拒否した事例のように、ネガティヴな介入は見られる）。首班のみでなく、重要な閣僚の選定にも関わったことがあるが、これは財政危機に際して蔵相を引き受ける人物がいなかった時にギツイを説得したことや、ティサ内閣後半にフェイエールヴァーリを国防相に就けたような場合に限られており、比較的に稀なことであった（スラーヴィ内閣危機に際してティサの入閣を認めなかった事例や、ビットー内閣の後継内閣にローニヤイとシェンニエイの入閣を拒否した事例のように、ネガティヴな介入はここでも見られる）。与党が首相を決定した事例は、この時期には一つとして見られない。

政党は、議会内の議員集団からなる議会党派と、社交団体でもある議会外の政党クラブとを活動の場とし、各選挙区レベルの地方有力者（名望家）とは各議員を介して繋がっていた。⁽¹²⁾ 与党デアーク党・自由党も、六七年派野党の合同野党・穏健野党も、どちらも保守派も自由主義派も内包しており、自由主義対保守主義という対立軸は政党システム上では不鮮明なままだった。むしろ、国制をめぐる対立軸が執拗な吸引力を発揮したことが目に付くだ

⁽¹⁴³⁾ 出発点における、デアーク党、中道左派、最左派の配列と、この時期の最後における、自由党、穏健野党、独立党の配列の間に見られる類似性には驚かざるを得ない。

- (1) GERHARD Péter, *Deszkafalak és potyuacsorók: Választói magatartás Pesten a Tisza Kálmán-korszakban*, Budapest: Korall, 2019, 21-42. old.; idem, „Jogszerű kampánykiadás vagy választási visszaélés? Egy peranyag tanulmányai”, *Korall*, 67. sz. 2017. 93-106. old.
- (2) GERŐ András, *Az első kisebbség: Népképviselő a Monarchia Magyarországon*, Budapest: Gondolat, 1988. 近年再刊された (Budapest: Habsburg Történeti Intézet, Közép- és Kelet-Európai Történelem és Társadalom Kutatásért Közalapítvány, 2017²⁾) が、引用は初版による。ゲレーの主張は、思想家ビロー・インマヌエル・ヴァーレンに由来する二重君主国期のハンガリー政治体制に対する批判を強く想起させるもので、著書の中にはビローへの(留保付きの)肯定的な言及もある(290-291. old.) が、ゲレーは他方で、ビローのハンガリー近代史観を批判する論考も物にしてゐる。Idem, „A szimbolikus politika fogalmi fogságában: A zsákutás Bibó”, in idem, *Képzelt történelem: Fejezetek a magyar szimbolikus politika XIX-XX. századi történetéből*, Budapest: Eötvös Kiadó, PolgART Kiadó, 2004, 247-264. old.
- (3) Idem, *Az első kisebbség*, 78-79. old. 述べた選挙地理の存在はアルベルト・トート (トール・ベート) の指摘によりよく知られてゐる。Adalbert TOTTH, *Parteien und Reichstagswahlen in Ungarn 1848-1892*, München: R. Oldenbourg Verlag, 1973.
- (4) SZABÓ Dániel, „I. rész (1867-1918)”, in Boros Zsuzsanna - Szabó Dániel, *Parlamentarizmus Magyarországon (1867-1944)*, Budapest: Korona Kiadó, 1999, 7-156. old., lásd 130-150. old. 引用は 135. old. 45°. 同書は教科書として刊行されたために注がていづつあるが、その一部は注付きの論文としても公刊されてゐる。Idem, „A magyar társadalom politikai szerveződése a dualizmus korában: Párt és vidék”, *Történelmi Szemle*, 34. évf. 1992. 3-4. sz. 199-230. old. ゲレーの著書に対してはネーを執筆した書評を参照。Idem, „Gerő András: Az

elsőpró kisebbség: Népkepviselet a Monarchia Magyarországon", *BUKSZ*, 1. évf. 1989. 1. sz. 113-115. old.

- (12) CIEGER András, *Politikai korrupció a Monarchia Magyarországon 1867-1918*, Budapest: Napvilág Kiadó, 2011, 33-47. old.

- (9) CONCHA Győző, „Jogi intézmény-e a parlamenti kormány?” *Budapesti Szemle*, 124. köt. 348. sz. 1905. december, 402-443. old.; DEÁK Albert, „Jogi intézmény-e a parlamenti kormány? Megjegyzések Concha Győzőnek a Budapesti Szemle 1905. decemberi számában megjelent cikkére”, *Erdélyi Múzeum*, 23. köi. új folyam 1. évf. 1906. 1. sz. 8-32. old.; CONCHA Győző, „A szerkesztőhöz”, *ibid.*, 2. sz. 89-93. old.; cf. DEÁK Albert, *A parlamenti kormányrendszer Magyarországon*, I-II. köt., Budapest: Grill Károly Könyvkiadóvállalata, 1912. 現在の憲法論者に及ぶの議論の要を述べた Pócsa Kálmán, „A kormányzás angol mintája”, *Politikatudományi Szemle*, 22. évf. 2013. 1. sz. 47-67. old.; SZENTE Zoltán, *Kormányzás a dualizmus korában: A XIX. századi európai parlamentarizmus és Magyarország kormányformája a kiegyezés után 1867-1918*, Budapest: Atlantisz Könyvkiadó, 2011, 385-405. old. より幅広く、ハンガリーにおける政治学の揺籃期に相当する一九世紀後半から世紀転換期の国家学の展開の中にコンチャやデアーク・アルベルトの業績を位置づけるものとして CIEGER András, „Pártok (és parlamentarizmus) a dualizmuskori politikai gondolkodásban”, in „Képzelmek embert”: *Politikaelméleti tanulmányok Schleht István 60. születésnapjára barátaiól, pályatársaitól, tanítványaitól*, szerkesztők: Bónai Mihály - CIEGER András, Budapest: Korona Kiadó, ELTE ÁJK Politológia Tanszék, 1999, 44-54. old. 45 長期にわたる一九世紀末以来の国王大権に対する制約と議会権限の強化という国制史の展開について László PETER, „Die Verfassungsentwicklung in Ungarn”, in *Die Habsburgermonarchie 1848-1918, Bd. VII: Verfassung und Parlamentarismus*, hrsg. von Helmut Rimpler und Peter Urbantsch, 1. Teilbd., Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, 2000, S. 239-540.
- (7) 憲法学者のセンチ・ソルターンは、この論争を紹介した際に、議院内閣制を議会優位の制度と考える者（コンチャ）よりも、君主と議会の均衡に基づく制度と考える者（デアーク・アルベルト）の方が、ハンガリーを議院内閣制の国と見做す傾向があったと評している。SZENTE, *op. cit.*, 394-395. old.

(8) 二重君主国期のハンガリーの政治発展に関して、独自の見解を表明しているのがハイドゥー・ティボルである。ハイドゥーによれば、ハンガリーは一八四八年に選挙権に関してイギリスの一八三二年改革をモデルとし(男子普選を導入した同時期のフランスをモデルとせず)、六七年の妥協に際しては実質的にこれが復活した。モデルとしたイギリスが同じ六七年、次いで八四年に選挙権を拡大したのに対して、ハンガリーでは民族問題のためにこの発展経路がとられなかった²⁶。Hajdu Tibor, „Mi valósult meg a polgári demokráciából Magyarországon”, *Világosság*, 22. évf. 1981. 8-9. sz. 511-520. old.; idem, „A magyar polgári állam és társadalom: A polgári demokrácia érvényesülése Magyarországon (1867-1944)”, *A szocialista demokrácia fejlesztésének kérdései*, írta Lakos Sándor stb., Budapest: MSZMP KB Társadalomtudományi Intézete, 1982, 23-42. old.

(9) WIENER György, „A többségi elv és a bizalmi kérdés a dualizmus kormányzati rendszerében”, *Jogtörténeti Szemle*, [új folyam 5. évf.] 2007. 3. sz. 68-88. old. この社会党系政治家として知られるウィーネルは「政治学者としての興味を惹かれる論点を幾つか物につらね」。

(10) SARIÓS Béla, *Deák és a kiegyezés*, Budapest: Gondolat, 1987, 86, 124-125, 137-138, 152-153. old. 妥協交渉に関する最新の研究として(一般読者向けの通俗書の体裁をとっているために注がついてないのが惜しめるが)、Deák Ágnes - Molnár András, *Deák Ferenc*, Budapest: Vince Kiadó, 2003, 97-147. old. (当該箇所は執筆者はデーク・アーゲネシユ)。この注は立ち入らなかったが、妥協交渉の経済・中央銀行に関する側面(ハンガリー側はロニー・メニュー・ホルトが交渉を担当した)「軍事面(アンドラーシ・ジュラが担当した)」については「それぞれ」CIEGER András: „Az alkudozás küzdőiterei: Lónyay Menyhért szerepe az 1867-es gazdasági kiegyezésben”, *Századok*, 140. évf. 2006. 6. sz. 1376-1404. old. (後引「シーケルの著書」ロニー・メニューに再録された。後掲注23参照); KÖVÉR György, „A bankkérdés: Két-bankrendszer vagy binacionális bank (1867-1878)”, *Századok*, 127. évf. 1993. 1. sz. 89-126. old. (A Magyar Nemzeti Bank története, I. köt.: Az Osztrák Nemzeti Banktól a Magyar Nemzeti Bankig 1816-1924, szerkesztette Bácskai Tamás, Budapest: Közgazdasági és Jogi Könyvtáradó, 1993, 196-233, 238-249. old.; KÖVÉR György, *A pesti City öröksége: Banktörténeti tanulmányok*, Budapest: Budapest Főváros Levéltára, 2012, 69-110. old. に再録されているが、引用は雑誌論文で行った); Gunther E. ROTHENBERG,

“Toward a national Hungarian army: The military compromise of 1868 and its consequences,” *Slavic Review*, 31 (4), 1972, pp. 805–816; Haidu Tibor, *Tisztkar és középiskola: Ferenc József magyar tisztjei*, Budapest: História, MTA Történettudományi Intézete, 1999, 11–26. old. 邦語では、武藤真也子「ハプスブルク帝国における二重制の形成と軍制再編——一八六八年の兵役法制定——」『東欧史研究』二〇号、一九九八年、四五―六四頁。妥協体制全般について邦語では、大津留厚『増補改訂』ハプスブルクの実験——多文化共存を目指して——』春風社、二〇〇七年。

(11) Sarló, *op. cit.*, 158. old.

(12) Nagy Miklós, „Ghyczy Kálmán, mint nádori írelőmester”, *Budapesti Szemle*, 219. köt. 635. sz. 1930. október, 1–28. old. 正確には、国王の神聖不可侵を定めた第一条、副王の地位とその神聖不可侵を定めた第二条、大臣の法的責任制とそれに基づく弾劾手続きを定めた第三―三六条はコシュートの起草になるもので、第七、八、二一条（国王大権事項として国王に留保された、叙任・恩赦・叙位・叙爵等の権限や、軍隊の国外での運用と軍事官職の任命権）は、宮廷の要望で（議会の承認のもとに）後から挿入されたものである。ギツィの伝記研究として、Szigeti István, „*Házának hasznos polgárja kívánok lenni*”: *Ghyczy Kálmán élete és politikai pályája* (1808–1888), Budapest: Gondolat Kiadó, 2012.

(13) 第三条の前段は、一七九〇―九一年議會第一二号法の規定を変更したものである。「法律の制定・廃止・解釈の権限は……合法的に戴冠した君主と、国会に合法的に集った王国の諸身分とに、共同して属する」（すなわち、立法は議会の決議と君主の裁可とを必要とする）。「法によつて定められた、もしくは定められる裁判組織は、王権によつて変更しえない。……執行権は、ただ法律の趣旨においてのみ、国王陛下によつて行使されるべし」。Corpus Juris Hungarici: *Magyar Törvénytar 1000–1895: Millenniumi emléktudás, 1740–1835. évi törvények, szerkeszti Márkus Dezső*, Budapest: Franklin-Társulat, 1896, 161–162. old. （以下では、法令集はCJH MT、年号、頁数と略記する。）つまり、啓蒙絶対君主ヨージェフ（ヨーゼフ）二世の改革を頓挫させたハンガリー諸身分が王弟リポルト（レオポルト）二世に押付けたのは、啓蒙の別のヴァリアント（モンテスキュー）であった。

(14) 一八四八年第三号法。CJH MT, 1836–1868, 218–221. old.

- (15) CONCHA, „Jogi intézmény-e a parlamenti kormány?” 409. old.
- (16) *Ibid.*, 416. old.
- (17) *CJH MT*, 1836-1868. 332. old. 但し、内閣の連帯性（首相の大臣指名権）よりも各大臣に対する君主の任命権が優位していたのは、オーストリア側の初期に見られた現象であり、首相の大臣選任権よりも国王の好みが優先されたのは、ハンガリーでは内大臣・国防大臣などの事例で見られたに過ぎない。ローニャイ内閣など、デアーク党政権期の例外については後述する。
- (18) 一八四八年第四号法第六条。 *Ibid.*, 222. old. この場合、議会が意図的に予算の可決を遅らせて新年に入ってから可決すると、国王の議会解散権は有名無実化する。
- (19) *Ibid.*, 333. old. 自由党政権後期から君主国末期にかけては、少数派野党の議事妨害によって議会審議が停滞し、予算や暫定予算が可決されないままに *ex lex* に陥ることが繰り返されたが、この法規定によって年末の議会解散が忌避された一方、（憲法学者たちが違憲性を指摘していたにもかかわらず）年明けには *ex lex* のままで議会が解散された。
- (20) 残りの二つは、副王の権限を廃止し、副王選出を無期延期した一八六七年第七号法と、国民衛兵に関する一八四八年第二二号法を停止した一八六七年第一号法。
- (21) 二重君主国期ハンガリー内閣の責任制についての法学者による近年の研究としては、先に挙げたセンチの著書、ペーテルが『ハプスブルク君主国』シリーズに書いた大部の論文の他に、戦間期まで扱ったベシュティ・シャーンドルにもあるものがあろう。 Pesti Sándor, „Parlament és parlamentarizmus Magyarországon (1848-1945)”, *Politikadományi Szemle*, 10. évf. 2001. 4. sz. 57-75. old., 11. évf. 2002. 1-2. sz. 263-297. old.; *idem*, *Az újkori magyar parlament*, Budapest: Osiris Kiadó, 2002.
- (22) 例として Andrásy Gyula [ifj.], „A parlamentarizmus sérelme”, *Budapesti Hírlap*, 1905. június 29. 1-2. old.; *idem*, „A parlamentáris kormányzat”, *Budapesti Hírlap*, 1905. augusztus 12. 1-3. old., augusztus 13. 1-3. old.
- (23) CIEGER András, „A kormányférfi: A dualizmuskori kormányzati politika egyes kérdéseiről”, *Századok*, új

folyam 11. sz. 1998. 3-23. old.

(24) Szabó Csilla, „Politikai elit függetlenségj ellenzékének szervezeti formálódása Magyarországon az 1860-as években: A 48-as Párt megalakulása”, *Századok*, 133. évf. 1999. 3. sz. 519-541. old.

(25)デアーク党に(こつて) Gerő András, „A Deák-párt és a politikai rendszer változása”, *Világosság*, 34. évf. 1993. 8-9. sz. 50-60. old. (Idem, *Utódok kor: Történeti tanulmányok, esszék*, Budapest: Új Mandátum Könyvkiadó, 1996, 10-22. old.に再録されている。)デアークは一八四八年革命時にはバッチャニー・ラヨシュ内閣の法務大臣で、対立する宮廷との交渉のためにバッチャニーと共に四八年八月にウィーンへ派遣されたが、交渉は実らず九月に辞任した。エトヴェシュは同じ内閣の宗教・公教育大臣、アンドラーシは四九年のデブレツェン政府のコンスタンチノープル大使、ローニャイは同政府の大蔵次官を務めた。三人は六一一年議会で、デアークを支持する「上申書派」の事実上の指導部を構成した。

(26) Szegeti, op. cit.; Kozáki Monika, *Tisza Kálmán és kormányzati rendszere*, Budapest: Napvilág Kiadó, 2003. 一八四八年には無名に近かった(全国政治で名を知られたのは、五九年のプロテストアント勅令への抗議運動の過程においてだった)ティサ・カールマーンが中道左派のリーダーとなったのは、自殺した前指導者(正確には、中道左派の前身にあたる、六一一年議会における「議会決議派」の指導者)テレキ・ラースローの甥だった(母がテレキ家の出身だった)からであり、妥協交渉への積極・消極姿勢をめぐる対立からデアークと疎遠になっていたギツィ(四八年革命時には、先に触れた二つの重要な法案を起草した後に、デアーク法相の下で次官を務め、六一一年議会では下院議長を務めた)を誘って二人で党の指導者役を務めていた。

(27) Tóth Ede, *Mocsary Lajos élete és politikai pályakezdetek (1826-1874)*, Budapest: Akadémiai Kiadó, 1967. 最左派は内部に更に微細な相違を抱えており、君主のみが共通の同君連合を目指すグループ(しばしば「四八年党」を名乗る)、オーストリアとの結びつき自体を否定する、亡命しているコシユートの立場を支持するグループ(「独立党」の名称はこれに由来する)、議会活動よりも社会運動の動員を通して革命を目指すグループが存在し、離合集散を繰り返す要因となった。

(28) Deák Ágnes, „Ő csak Deák és nem deákpárti”: Deák és pártja 1869 után”, in *Zala követe, Pest képviselője*:

Deák Ferenc országgyűlési tevékenysége 1833-1873, szerkesztette Molnár András, Zalaegerszeg: Zala Megyei Levéltár, 2004, 261-321. old., lásd 267-268. old. デアーク党は、この不均質な構成のために、政党としての綱領を持たない議員集団だった。Méri Gyula, *Magyar politikai pártprogramok (1867-1914)*, Budapest: Ranschburg Gusztáv Könyvkereskedése, 1934, 7-16. old. シェンニエーは、一八六〇年一〇月勅令後の一時期にハンガリー総督会議の副議長、六五年からは同議長（大蔵卿 tárnokmester）を務めた人物で、同じく六〇年一〇月勅令後の一時期に総督会議議長、六五年からウイーンのハンガリー政庁宰相 kancellár を務めて、妥協交渉を準備したマイラート・ジェルジ（六七年からは上院議長）と並ぶ、保守派の大立者だった。Halász Imre, *Egy letűnt nemzedék: Emlekezések a magyar állam kialakulásának újabb korszakából*, Budapest: Nyugat, 1911, 465-483. old.

(29) いわゆる「ビハル綱領」では、派遣団・共通内閣の廃止と、通貨・貿易面での独立、独立軍の設立、独立の外交上の認知とが要求に掲げられた。Kozári Monika, „A balközép párt válsága 1867-68-ban”, *Századok*, 131. évf. 1997. 3. sz. 723-760. old.

(30) デアーク・フェレンツは党規律に服さない、自身の信条に基づく言動をとることが少なかつたために、政府に少なからず困難を引き起こしたが、妥協と二重制に関しては常に政府を支持する発言をした。Deák Ágnes, *op. cit.*, 272-278. old. 独自行動の具体例として、*ibid.*, 284-285. old. 二重君主国期ハンガリー議会における党規律について、Pesti Sándor, „Pártegyelem a dualizmus kori Magyarországon”, *Századok*, új folyam 14. sz., 1999. 55-77. old. デアークとアンドラーシの関係については、戦間期に二重君主国期のハンガリー史を執筆したグラツの記述も参照。「アンドラーシは完全にデアークの信任を得ており、必要な場合には、辞任するからデアークが代わって everything 上手にやればいい」と脅迫して、彼に対しても自分の意思を通すことができた。Gratz Gusztáv, *A dualizmus kori Magyarország története 1867-1918*, I. köt., Budapest: Magyar Szemle Társaság, 1934 (Budapest: Akadémiai Kiadó reprint kiadása, 1992), 113. old.

(31) Sárós, *op. cit.*, 152, 171, 190, 192. old.

(32) デアーク党の中核グループのリーダーを、デアークの補佐役だったチェンゲリと指摘するのは、Móricz Pál, *Országgyűlési pártok küzdelmei a koronázástól a Deák és balközép pártok egybeolvasásáig (1867-1874)*, II.

köt., Budapest: Országgyűlési Értéslő, 1892, 33. old.; cf. Cieger András, "Kormány a merlegen — a múlt században: A kormány helye és szerepe a dualizmus politikai rendszerében (1867-1875)", *Századok*, új folyam 14. sz. 1999, 79-107. old., lásd 95. old.

- (33) 邦語では、月村太郎「オーストリア＝ハンガリーと少数民族問題——クロアチア人・セルビア人連合成立史——」東京大学出版会、一九九四年、六五～七五頁。

- (34) カール・カーザー（越村勲・戸谷浩編訳）『ハプスブルク軍政国境の社会史——自由農民にして兵士——』学術出版会、二〇一三年、三六二～三七五頁。軍政国境地帯が軍事省の所轄から民政に移管されたことで、ハンガリーは（軍事費を中心とする）共通予算への拠出を、軍政国境地帯の分として二%を先に引き受けた上で（*Bracipnum*と呼ばれる）、残りの九八%をクォータ（当初は三対七）で割ることとしたため（一八七二年第四号法）、ハンガリーの拠出割合は実質的には三一・四%となった（一八九九年の改定でクォータが一对二、従って、実質的には三四・四%となるまじ）。

- (35) 武藤前掲論文。

- (36) GRATZ, *op. cit.*, 38-110. old.; HADU, *Tisztikar és közeposztály*, 255-257. old.

- (37) 邦語では、渡邊昭子「近代ハンガリーにおける諸教会と国家——一八六八年の『教育法』をめぐる——」『東欧史研究』二二号、一九九九年、三～二七頁、同「ハンガリーにおける教育法（一八六八年）の施行と制度的安定化——国家・教会・地域住民——」『東欧史研究』三一号、二〇〇九年、二～二四頁。

- (38) プレプク・アニコー（寺尾信昭訳）『ロシア、中・東欧ユダヤ民族史』彩流社、二〇〇四年、八八～九一頁。

- (39) Cieger András, "Az elverszerűség paradoxonjai: Eötvös József második minisztersége (1867-1871)", in *A kinszet csak fáradsággal hozható napvilágra: Tanulmányok a báró Eötvös József születésének 200. évfordulójára*, szerkesztette Gáncó Gábor, Budapest: ELTE Eötvös József Collegium, 2013, 329-357. old.; Paul Bövy, *Joseph Eötvös and the Modernization of Hungary, 1840-1870: A Study of Ideas of Individuality and Social Pluralism in Modern Politics*, Boulder: East European Monographs, 1985, pp. 98-124. 例えど、民族的同権法や一八六一年議会の民族法委員会の準備した法案や、一八六五年召集議会の民族法委員会小委員会の準備した法案と比

てい、後退を余儀なされた。Karus László, „Egy kisebbségi törvény születése: Az 1868. évi nemzetiségi törvény évfordulójára,” *Regio—Kisebbségi politika, társadalom*, 4. évf. 1993. 4. sz. 99–128. old.; KEMÉNY G. Gábor, *A magyar nemzetiségi kérdés története, I. rész: A nemzetiségi kérdés a törvények és tervezetek tükrében 1790–1918*, Budapest: Gergely R. R.-T., 1947, 51–112. old. 同法前文の「政治的国民」概念が挿入した点に注意。

- (40) CIEGER András, „Királyi demokrácia: Szabadságjogok a magyar liberálisok reformterveiben 1867 után,” *AETAS*, 24. évf. 2009. 3. sz. 55–82. old.; cf. Péter László, „Volt-e magyar társadalom a XIX. században?: A jogrend és a civil társadalom képződése,” *Valóság*, 32. évf. 1989. 5. sz. 1–24. old. (Idem, *Az Elbától keletre: Tanulmányok a magyar és kelet-európai történelemből*, Budapest: Osiris Kiadó, 1998, 148–186. old. に再録されたこと)

- (41) CIEGER, „Az elvszerűség paradoxonjai”, 348–350. old. 自由カトリシズムの立場をとり、トマシュの進めた改革の挫折は、一八六〇年代にローマ・カトリック教会が自由主義との対決姿勢を強めたことを背景として理解すべきである。 *Ibid.*, 351–352. old.

- (42) Salacz Gábor, *A magyar kultúrhare története 1890–1895*, Pécs: Dunántúl Pécsi Egyetemi Könyvkiadó és Nyomda, 1938, 9–14. old.

- (43) 後からの回想になるが、「不健全な政党情勢の中で、すべての内閣危機が憲法危機を、苦勞して闘い取った基盤の動搖を引き起す危険があるために、私は発言を控えたのです」(チェンゲリのギツイ宛書簡「一八七三年十一月十三日」)。*Csengery Antal hátrahagyott iratai és feljegyzései*, közreadta CSENGERY Lóránt, Budapest: Magyar Történelmi Társulat, 1928, 328. old.

- (44) CIEGER András, „A számok szorításában: Lónyay Menyhért pénzügyminisztersége (1867–1870),” *Századok*, 136. évf. 2002. 6. sz. 1295–1330. old. (ローニャイ伝に再録、後掲注23参照)

- (45) GRATZ, *op. cit.*, 44–46. old.

- (46) ボイスト辞任の直接の原因は、オーストリア側のカール・ホーエンヴァルト内閣の三重制を目指す試みの失敗に

ある（アンドラーシ——とローニャイ——の反対によって頓挫した）が、外相交代の背景には、普仏戦争でのプロイセンの勝利を受けて、対プロイセン報復路線から親プロイセン＝ドイツ帝国路線への外交政策の転換があった。三重制の試みについて邦語では、鳥越泰彦「オーストリア＝ハンガリー帝国における反アウスグライヒ運動」『東欧史研究』一四号、一九九一年、二〇～三九頁。

(47) これによって、二人の共通文民大臣（外相、共通財務相）のうちハンガリー人が片方（だけ）を務めるという慣行が確立する（後にカーライ・ベーニ共通財務相と同時期に外相を務めたタスタフ・カールノキは、ハンガリー貴族の末裔だが、ドイツ人と見做された）。Ress Imre, „A közös minisztériumok szerepe a magyar államéletben (1867-1900)”, *Limes*, 11. évf. 1. sz. (31. sz.) 1998. 21-33 old.

(48) Eötvös József, „Napfényzetek 1870 augusztus [6]-tól kezdve 1870 november 30-ig”, *közzé teszi s jegyzetekkel ellátja Czege Imre, Történelmi Szemle*, 21. évf. 1978. 2. sz. 364-410. old., lásd 396. old. (1870. okt. 12.), 407. old. (1870. nov. 15.)

(49) 後継内閣について、閣議での報告を日記に記したパウレルによれば、「アンドラーシの報告では、……ローニャイが首相になる。彼「アンドラーシ」はスラーヴィを望んだが、こちら「スラーヴィ」には自信がない。」（引用者注）Pauler Tivadar, *Napi jegyzetek, Országos Széchényi Könyvtár Kéziratár, Quart. Hung.* 2611/2, 1871. november 7.

(50) Czege András, „A bizalmatlanság kora: Lónyay Menyhért a kormány élén”, *Századok*, 135. évf. 2001. 1. sz. 61-102. old. (ローニャイ伝に再録、後掲注53参照)

(51) 国王の強い意向を受けて、首相以外の全閣僚が留任し、ローニャイは後にこれを深く後悔することになる。*Ibid.*, 63-64, 98. old.

(52) Deák Ágnes, *op. cit.*, 305. old.

(53) Czege, „A bizalmatlanság kora”, 98. old. ティサに近い中道左派のモリツは、「ローニャイの首相職は、我等が国王御自身の proprio motu ヌニシアティヴに基づくものと見做された」と端的に記している。Moricz, *op. cit.*, 32-33. old. ローニャイは共通財務相在任中に皇帝＝国王の信頼を獲得した。Juhász Lajos, „Lónyay Menyhért kö-

zós pénzügyministersége 1870-71", *Századok*, 75. évf. 1941. 9-10. sz. 363-404. old.; Cieger András, *Lónyay Menyhért 1822-1884: Szerepek – programok – konfliktusok*, Budapest: Századvég Kiadó, 2008, 274-276. old. 国王が自身の首相候補を強く推す事例は、この後、自由党政権後期になって、共通財務相カーライ・ペーニが庇護したクロアチア総督クエン＝ヘーデルヴァーリ・カーロイをたびたび持ち出すことになるまでは見られない。

(54) Cieger András, "A hatalomra jutott liberalizmus és az állam a dualizmus első felének magyar politikai gondolkodásában", *Századvég*, új folyam 20. sz. 2001. 95-118. old. エトヴェシユは一八七〇年一〇月(普仏戦争の最中である)にローニヤイと交わした会話を日記に書き留めている。「彼個人の状況についても、彼が首相を引き継ぐことになるという知らせに關して、長いこと話した。……彼の基本的な考えは、ハンガリーは、現在ある立憲的自由の程度においては統治できない、そのためにこの制約が国民の利益である、というものだ。……ドイツがここ数年に成し遂げたことは、ビスマルクが立憲制の原則を乗り越えたことによってのみ成し遂げられた。……ローニヤイが退出した後、美しい月明かりの下でドナウ川沿いを、あれこれ考えながら、我が身のことも考えながら、一時間以上そぞろ歩いた。」Eötvös, *op. cit.*, 394. old. (1870. okt. 4.)

(55) 議会対策として法相ビットナーが下院議長に転出して、文相パウレルが後任に横滑りし、トレフォルト・アーゴシユトンが文相に就いた。Cieger, "A bizalmatlanság kora", 77-80. old.

(56) *Ibid.*, 71-74, 80-82. old.; Gratz, *op. cit.*, 114-116. old. 中道左派の指導者であったティサ・カールベーンは、これを後に後悔するようになった。Horánszky Lajos, *Tisza István és kora*, I. köt. sajtó alá rendezte Horánszky Nándor, [Budapest]: Teller Kiadó, [1994], 305-306. old. 「二重君主国期ハンガリー議会史における議事妨害について」以下が概観を与える。Mezey Barna, "Az obstrukció a magyar jogtörténetben", in *Parlamentai Dolgozatok*, VI. *A plenáris ülés*, I. rész, szerkesztette Sourjész István, Budapest: Budapesti Közgazdaságtudományi Egyetem Közszerkeleti Tanulmányi Központ, Parlament Műszertani Iroda, 1997, 307-337. old.

(57) 選挙対策や報道操作に支出された首相府の機密費の決算書が(ローニヤイの個人文書の中に)残されている。Cieger András, "A kormányzati politika rejtett működése: A miniszterelnök bizalmas kiadásai 1872-ben", *Történelmi Szemle*, 69. évf. 2018. 4. sz. 1-20. old.

- (58) 「ローニヤイはまだ事を引き延ばしたいようだが、上手く行かない。見たところ、内閣の外にも内にも彼に反対する謀議がある。」 PAULER, *op. cit.*, 1872. november 28.
- (59) CIEGER András, „Gazdagodás és korrupciós vád: A magyar politikusok vagyongyarapításának lehetőségei és megélése az 1860-70-es években”, *Századok*, új folyam 40. sz. 2006. 31-68. old. (idem, *Politikai korrupció a Monarchia Magyarországon 1867-1918*, 51-91. old. 2冊録を参照) ; idem, „A bizalmatlanság kora”, 97-98. old. ; DEÁK Ágnes, *op. cit.*, 305-306. old.
- (60) WERTHEIMER Ede, *Gróf Andrássy Gyula élete és kora*, II. költ., Budapest: Magyar Tudományos Akadémia, 1913, 195. old. 3. jgyz. ロギーリが認める446に、アンダーラースは戦後伝記研究に恵まれたこと。Kozári Monika, *Andrássy Gyula*, Budapest: Gondolat Kiadó, 2018, 9. old.
- (61) GRATZ, *op. cit.*, 124. old. 軍部から疑いの目を向けられていた国防軍の組織化を担当する国防大臣には、一八四八年革命時の国防軍将校出身のセンデ・パールが就くのと同時に、次官には四八年革命時に皇帝軍に勤務した、国王の信頼するフェイエールヴァーリ・ゲーザがお目付け役として派遣された。HABU, *Tisztikar és közeposztály*, 257. old.
- (62) CIEGER, „Kormány a merlegen – a múlt században”, 89-91, 95, 98-99. old.
- (63) デアーク党内には、保守派（シェンニエイら）、自由主義派（ホルヴァート、ゴロヴェーら）、デアーク派（ゾム・チェンゲリの他に、ビットー、デアークの養女の婿でもあるセル・カールマーンら）、ローニヤイ派、官僚グループ（「小人 kis emberek グループ」などと呼ばれた万年与党派）などの派閥が存在した。GRATZ, *op. cit.*, 127-128. old. ; cf. CIEGER, „A bizalmatlanság kora”, 80. old.
- (64) 泡沫起業熱時代を背景に、ウィーン中心の鉄道網をペシエト中心の（二重君主国に相応しい二つの中心を持つ）それに再編する野心的な鉄道建設計画を進めるために政府が与えた鉄道建設債への利子保証の支出に加えて、農業国のハンガリーを襲った不作による税収減のために、ハンガリー政府は一八七三年夏に支払い不能の危機に陥った。ハンガリー政府は、ロスチャイルド系銀行団の提示した極めて不利な条件の下で、巨額の融資を受け入れざるを得なかった。Kövecz György, 1873. *Egy kirach antóniája*, [Budapest]: Kozmosz Könyvek, 1986; idem, „Cégek és pi-

acok között: A Rothschild-konzorcium és a magyar kincstári utalványok, 1873-1874 (esettanulmány)", in idem, *A felhalmozás éve: Társadalom- és gazdaságtörténeti tanulmányok*, Budapest: Új Mandátum Könyvkiadó, 2002, 283-297. old.

(95) KÖVÉR, 1873, 110-119. old.

(96) *Ibid.*, 104-105. old. (「ハンニエは議会の財務委員会に蔵相を「数十万フォリントを求めヨーロッパ中行商してhausirozni回った」ビュダヤ人行商人に擬えた」); CIEGER András, „A politika forgószínpadán: Lónyay Menyhért útja a politikában (1873-1875)”, *Századok*, 133. évf. 1999. 3. sz. 463-496. old. (著書に編入する際には書き直された⁹⁶⁾)

(97) 東部鉄道について KÖVÉR György, „Állam-bank-vasútépítés: A Magyar Keleti Vasút (1868-1873)”, in *Magyar Történeti Tanulmányok*, 19. szerkesztette Veress Géza, Debrecen: KLTE, 1986, 5-17. old. (Idem, *A felhalmozás éve*, 274-282. old. に再録された⁹⁷⁾)

(98) 政党合同に経緯について M. Kondor Viktória, *Az 1875-ös pártfúzió*, Budapest: Akadémiai Kiadó, 1959; SZIGETI, *op. cit.*, 247-306. old.; KOZÁRI, *Tisza Kálmán ...*, 211-245. old. 同時代文獻に WERTHEIMER, *op. cit.*, 196-209, 216-237. old.; CSÉNGERY Antal, „A fúzió történetéhez”, in *Csengery Antal hátrahagyott iratai és feljegyzései*, 332-346. old.; MÓRICZ, *op. cit.*; OLÁH Gyula, *1875-ik évi fúzió története*, Budapest: Franklin-Társulat, 1908. モーリツはティサ派(中道左派)・オラーフはギツィ派(中央党)だった。中道左派の政權参加をめぐる議論が盛んになったのは「一八七三年七月に「中道左派の機関紙『監視人』の編集者(で、ティサに近い)チェルナートニ・ラヨシュ(ローニヤイの失脚の引き金となった発言をした議員でもある)が、社説で「一八六七年第一二号法の改正は、一八六七年第一二号法に基づいてしか実行できないのであるから、……野党は現行の〔国制上の——引用者注〕基盤を認めることはできないとか、まず先に存在する基盤を廃止してからしか政權に参加できないなどという議論は、ひどく虫に食われた穴だらけの落花生と名付けてよいではないか」と問いたい」と、中道左派の政權参加を擁護する論陣を張ったことが一つの契機となった⁹⁸⁾ CSERNÁTONY [Lajos], „Mirel van szó VII.” *Ellenőr*, 1873. július 29. 1. old.

(69) 上記の社説が党内で議論呼んだことから、静養先から手紙を寄せたティサは、「今日、エリコの壁は叫んでも崩れはしない。繰り返し反撃された同じ道を通って城砦を占拠しようとするのは愚かであり、目的を達成する方法は、占拠できなかった城壁を避けて通ることである」と指摘している。Tisza Kálmán, „Ostende, aug. 28-án”, *Ellenőr*, 1873. szeptember 3. 1. old.

(70) SZIGETI, *op. cit.*, 216-218, 260-264, 268-284. old.

(71) Tóth Ede, „A Függetlenségi Párt megalapítása”, *Századok*, 97. évf. 1963. 5. sz. 985-1016. old. (同著者のモチャール伝の終章にはば相当するが、引用は論文から行う。)

(72) 例えば、チエルナートニは「自由主義と保守主義の政党設立を望むものである。……このために、——健全な政党設立に際しては——中道左派と右派の自由主義的な部分とが、両者共に今何をなすべきかを考え、どの点でどこまで現状のまま共に進むことができるかを考えれば、両者は合同できるだろう」と書いていた。CSERNÁTONY [Lajos], „Utóirat III.” *Ellenőr*, 1873. szeptember 10. 1. old.

(73) トリノに亡命中のコンネートはこの立場であった。Tóth, „A Függetlenségi Párt megalapítása”, 987-988. old.

(74) ティサの国王との謁見「スラーヴィー、ティサ、ギツィの間の交渉は「ギツィの手記によつて知る」ことができる。Kozári Monika, „Ghyczy Kálmán naplója az 1874. évi kormányváltásról”, *Történelmi Szemle*, 38. évf. 1996. 1. sz. 99-124. old. アン・ド・ラーシの果たした役割は「WERTHEIMER, *op. cit.*, 203-209. old.

(75) 中道左派との連合交渉が頓挫した後、スラーヴィーが政権維持に意欲を見せていた（デアーク党保守派のシェンニエーや中央党のギツィの入閣を期待していた）のに対して、彼に中道左派との連合政権交渉を委任していた国王は、もはや彼に後継政権を委ねなかった。Kozári, „Ghyczy Kálmán naplója”, 116, 120. old.; WERTHEIMER, *op. cit.*, 208. old.

(76) DEÁK Ágnes, *op. cit.*, 319. old.

(77) WERTHEIMER, *op. cit.*, 209. old.; SZIGETI, *op. cit.*, 290-293. old.

(78) OLÁH, *op. cit.*, 226-227, 230-237. old.

(79) Ferenc Pecze, „Die Wahlrechtsreform in der Anfangsperiode des Dualismus”, in *Die Freiheitsrechte und die*

Staatstheorien im Zeitalter des Dualismus: Materialien der VII. ungarisch-tschechoslowakischen Rechtshistorikerkonferenz in Pécs (23-25 September 1965), Redakteur: Andor Csizmadia, Budapest: Tankönyvkiadó, 1966, S. 27-35.

- (80) Szabo Dániel, „Ki maradhat a parlamentben?: A képviselői összejárási lehetőség kérdése a dualizmus korában”, *Széződés, új folyam* 30. sz. 2003. 35-58. old.

- (81) 三か月の暫定予算 indeterminálás (前年度予算の三か月分の範囲内での予算執行を許可する授權法) が成立し、予算案の審議は年を跨いで行われた。Szigeti, *op. cit.*, 302-303. old.; Cseger, „A politika forrászínpadán”, 489-490. old. ロスチャイルド系銀行団からの一八七三年の巨額融資の後半部分に関する交渉について Szigeti István, „Az államcsőd árnyékában: Ghyecz Kálmán pénzügyminiszter és az 1874-es kölcsön felvétele”, in *A Laján innen és túl: Elektronikus ünnepi tanulmányok Somogyi Éva 70. születésnapjára*, szerkesztette Rész Imre - Szabo Dániel, Budapest: MTA Történettudományi Intézete, 2007, 275-301. old.

- (82) WERTHEIMER, *op. cit.*, 217-219. old.

- (83) *Az 1872-iki évi szeptember 1-re hirdetett Országgyűlés Képviselőházának naplója*, XIV. köt., szerkeszti Nagy Iván, Buda: Magyar Királyi Államnyomda, 1875, 288-300. old., lásd 295-299. old. (1875. február 3.) 以下では議事録は *OGY KH naplója*, 1872-75. 巻号、頁数 (日付) などと略記する。

- (84) M. KONDOR, *op. cit.*, 134. old.; OLÁH, *op. cit.*, 294-295. old.

- (85) 「政党情勢が本質的に変化し、我々の側からは障碍となることを望まぬ。」PAULER, *op. cit.*, 1875. február 11.

- (86) 中道左派やシェンニエイ派・ローニヤイ派には不信任案を可決して内閣危機を招来するというプランがあったが、デアーク党のチェンゲリは、不信任案が通れば「議院〔内閣——引用者補足〕制の概念からして」君主は野党指導者に組閣を依頼せざるを得なくなる、として猛反対し、デアーク党の生命力を誇示する必要を訴えて、予算案の第一読会通過後の総辞職を内閣に提案した。CSÉNGÉRY, *op. cit.*, 333-335. old.

- (87) じきにこのグループのリーダーとして抬頭するアポニ・アルベルト(一八四八年革命前にウィーンのハンガリー政庁宰相を務めた保守派の重鎮、アポニ・ジェルジの息子)は、保守派の内の多数派は、「伝統的な宮廷派の」皇帝

政府支持の——引用者注「精神から」自由党内に留まったと指摘している。APONYI Albert, *Emlékirataim: Ötven év, [I. kötet] Ifjúkorom – huszonöt év az ellenzékben*, Budapest: Pantheon Irodalmi Intézet, 1922, 64-65. old. 自由党も「デアーク党同様に党綱領を持たなかつた不均質な議員集団に留まつた。」MÉREL, *Magyar politikai pártprogramok*, 1934, 25-32. old.

(88) TAKÁCS József, „Mit jelentett liberálisnak vagy konzervatívának lenni 1875 táján Magyarországon?,” *Jelenkor*, 36. évf. 1993. 6. sz. 542-548. old.

(89) WERTHEIMER, *op. cit.*, 225. old. アンドラーシは「シェンニエイのオーストリア側における連邦主義派＝保守派との繋がりを警戒していた。」

(90) *Ibid.*, 226-227. old.; OLÁH, *op. cit.*, 306. old. 閣議で交渉の経過を報告したビットーによれば、「ティサは国制に関して満足のいく返事を与えた。陛下はシェンニエイとローニヤイに立腹である。なぜなら、彼らが混乱を引き起したのだから。」PAULER, *op. cit.*, 1875. február 18.

(91) 両党間の会合についてはチェンゲリの手記が詳細である。CSÉNGERY, *op. cit.*, 332-346. old. 二月一九日のスラーヴィ邸での会合には、仲介者としてビットー、デアーク党からチェンゲリ、スラーヴィ、ゴロヴェ、セール、中道左派からティサ、シモニ・ラヨシユ、ペーチ・タマーシユ、ヴァーラディ・ガールが参加した。スラーヴィは、銀行問題についても、関税同盟についても、ティサの議会での発言と自分たちの立場の間に相違はないことを強調した。ティサは、国制上の問題に関して大臣は国王の事前同意なしに行動を起こすことは許されないと明言した。 *Ibid.*, 336, 339. old.

(92) アンドラーシがウィーンから電報でスラーヴィ、ヴェンクハイム、ティサの順で首相に推した（スラーヴィは病気を理由に断った）。WERTHEIMER, *op. cit.*, 229-232. old.; cf. PAULER, *op. cit.*, 1875. február 24.

(93) WERTHEIMER, *op. cit.*, 233-234. old.; CSÉNGERY, *op. cit.*, 339-344. old.; OLÁH, *op. cit.*, 309-311. old. 再度の協議には両党から七名ずつが参加したが、最後に首相候補のヴェンクハイム、蔵相候補のセール、チェンゲリ、ティサの四人が残った。CSÉNGERY, *op. cit.*, 343-344. old.

(94) 保守党を名乗らなかつたのは「一八四八年革命前の宫廷派「保守党」の不人気を考慮してである。OLÁH, *op.*

cit., 312-324. old. ハンガリーにおいて保守主義は、ウィーンの宮廷への忠誠と結びついているがために、ナショナリズムを掲げることができないというジレンマを抱えており、限定的な支持しか得られなかった。APPONYI, *op. cit.*, 29. old.; TAKÁCS, *op. cit.*, 546. old.

(65) Tóth, „A Függetlenségi Párt megalapítása”, 1010-1013. old.

(66) Oláh, *op. cit.*, 325, 332. old.

(67) この点を強調するのは Móricz, *op. cit.*, 147-148. old. だが、ティサは自分に首相の座を用意したのはアンドラーシと考えていた。アンドラーシは、一八七五年一月下旬のティサとの会談で、自身が外務大臣として東方問題に介入するには、ハンガリー国内の安定が不可欠であるとして党合同を説得しており、実際に首相に就いてからのティサは、常にアンドラーシの（例えば、ボスニア占領のような、ハンガリー国内ではしばしば不人気だった）外交政策を国内で擁護し、支えることとなった。WERTHEIMER, *op. cit.*, 217-219. old.; Kozári, *Tisza Kálmán ...*, 362. old.

(98) 経済妥協交渉については、オーストリア側の立場から書かれたものだが、以下が概観を与える。Berthold SUTTER, „Die Ausgleichsverhandlungen zwischen Österreich und Ungarn 1867-1918”, *Südostdeutsches Archiv*, 11. Bd. 1968, S. 71-111. 中央銀行交渉については Kövér, „A bankkérdés” が最も詳細に伝える。ティサ内閣に関しては、今なお Friedrich GOTTAS, *Ungarn im Zeitalter des Hochliberalismus: Studien zur Tisza-Ära (1875-1890)*, Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, 1976 が参照されるべきである。

(99) ハンガリーは間接税・関税に関して変更を要求していた。砂糖・火酒・ビールに課されていた間接税に関しては、これらがオーストリア側での生産の方が多く、生産地課税ではハンガリーでの消費に見合った間接税が徴収されないことから、消費地課税に変更するよう求めていた。また、輸出品への間接税の払い戻しがクォータに基づいていたことも、ハンガリーの負担を過剰にしていると主張していた。間接税に関する要求はオーストリア政府の拒否にあつて殆ど実現しなかった。このため、シモニ商務相は一八七六年七月に既に辞任していた。関税に関しては、オーストリア側が工業保護関税を、ハンガリーが農業自由貿易と共通財源となる奢侈品関税の引き上げとを主張しており、最終的には両者の妥協が実現した。GOTTAS, *op. cit.*, S. 129-146.

(100) APPONYI, *op. cit.*, 74. old.

- (10) 独自の中央銀行（割引商業銀行）設立の試みは、一八七三年五月の恐慌の発生で一度頓挫していた。セール蔵相の下で、一八七三―七四年の融資を永久公債に借り換える交渉がロスチャイルド系銀行団との間で進んでいたが、銀行団も独立の中央銀行設立には反対だったと云う。KÖVÉR, „A bankkérdés”, 108-111. old.; cf. idem, „Államháztartási válságtól az aranyáradekig: Széll Kálmán pénzügyminisztersége”, in *Törvény, jog, igazság; Széll Kálmán életműve, szerkesztette ifj. Bertényi Iván*, Budapest: Mathias Corvinus Collegium – Tihanyi Alapítvány, Széll Kálmán Alapítvány, 2015, 117-152. old.
- (102) Idem, „A bankkérdés”, 107-108, 110-112. old.
- (103) 先に辞任したシモニ前商務相がリターナーとなった。MÉREI, *Magyar politikai pártprogramok*, 1934, 43. old.; Mérei Gyula összeállította és sajtó alá rendezte, *A magyar polgári pártok programjai (1867-1918)*, Budapest: Akadémiai Kiadó, 1971, 361. old.; APONYI, *op. cit.*, 79. old.
- (104) KÖVÉR, „A bankkérdés”, 114-116. old.
- (105) ティサは、少数派政権の下での解散総選挙の可能性を周囲に漏らしていた。シモンニエーは議会で、外国の事例に言及して、少数派政権が後に議会多数派を獲得するのでは立憲制に反しないと指摘しつつ、このことが組閣を断念した理由ではなくと説明している。VIRÁR Béla, „A szabadelvűpárt története”, in *Politikai Magyarország*, IV. köt. Budapest: Anonymus Történelmi Könyvkiadó Vállalat, 1914, 1-106. old., lásd 18. old.; APONYI, *op. cit.*, 75, 80-81. old.; *OGY KH naplója*, 1875-78. X. köt. 52-54. old. (1877. február 27.)
- (106) KÖVÉR, „A bankkérdés”, 116-117. old. 一八七八年第二五号法「オーストリア＝ハンガリー銀行定款第二三・二八・三三項参照」*CJH MT*, 1871-1878, 264-266. old. 配当の配分、オーストリア国民銀行からの新絶対主義期政府への融資の返済では「クォータ（三対七）」が基準とされ「ハンガリー政府は前者を後者の返済金に充てた」。KÖVÉR, „A bankkérdés”, 126. old. 121. jgyz.
- (107) 可「三六」否「五五」欠席「一四七」。*OGY KH naplója*, 1875-78. XIV. köt. 250-263. old. (1878. január 28.)
- (108) KÖVÉR, „A bankkérdés”, 117-118. old.; GOTTAS, *op. cit.*, S. 117, 142; MÉREI, *Magyar politikai pártprogramok*, 1934, 43. old.; idem, *A magyar polgári pártok programjai*, 1971, 365. old.; APONYI, *op. cit.*, 79.

old.

- (109) 可二一九、否一八三、欠席四〇。OGY KH naplója, 1875-78. XV. köt. 328. old. (1878 február 19.) 第三読会では、起立多数で可決された。Ibid., XVI. köt. 135-136. old. (1878 március 2.)
- (110) MEREI, *Magyar politikai partprogramok*, 1934, 43-49. old.; GRATZ, *op. cit.*, 159, 162-163. old.; cf. APPONYI, *op. cit.*, 95-96. old.
- (111) 全四二三議席のうち、自由党が二三九、独立党が七六、合同野党が七五議席。SZABÓ, „I. rész (1867-1918)”, 149. old.
- (112) 国王が蔵相の辞任を認めたのは一〇月四日だが、事務管理に暫定蔵相として留め置かれ、一日の暫定事務管理内閣成立で解任された。Budapesti Közlöny, 1878. október 6. 1. old., 1878. október 13. 1. old., セールの予想は翌年以降の国際金融市場の盛況によって回避され、むしろ後任の蔵相のより低利国債への借換えが可能になった。Kövér, „Államháztartási válságtól az aranyjáradékig”, 142-143. old.; cf. idem „Az aranyjáradék-konverzió kezdetei (1881): Egy nemzetközi értékpapír-tranzakció kutatásának problémái”, in *Léptékváltó társadalomtörténet: Tanulmányok a 60 éves Benda Gyula tiszteletére*, szerkesztette K. Horváth Zsolt - Lugosi András - Soháda Ferenc, Budapest: Hermész Kör, Osiris, 2003, 481-501. old.; idem, „A láthatatlan aláúró: A 4%-os magyar államkötvények jegyzői 1881-ben”, *Korall*, 14. sz. 2003. 54-78. old.; idem, „Kincstár és konzorcium: A magyar aranyjáradék-konverzió mérlegei, 1881-1884”, *AETAS*, 19. évf. 2004. 1. sz. 74-99. old.
- (113) GOTTAS, *op. cit.*, S. 67-70; KOZÁRI, *Tisza Kálmán* ..., 315-319. old.
- (114) VIKÁR, *op. cit.*, 42. old.
- (115) APPONYI, *op. cit.*, 97-98. old.; KOZÁRI, *Tisza Kálmán* ..., 322-323. old.
- (116) サベール蔵相のより再び財政規律が緩んだことが、Kövér György, „A bécsi Rothschildok és az 5%-os magyar papírjáradék (1881-1883)”, *AETAS*, 16. évf. 2001. 3-4. sz. 140-158. old.
- (117) *Budapesti Közlöny*, 1878. október 13. 1. old., 1878. december 7. 1. old.; OGY KH naplója, 1878-81, II. köt. 52-55. old. (1878. december 7.)

(301)

(118) 法典編纂面では、一八七八年の刑法典（通称「チェメギ法典」）の成立が特筆される。この後、二重君主国期には刑事訴訟法が一八九六年、民事訴訟法が一九一一年に成立するが、一八六一年に大法官会議（アポニ・ジェルジ大法官 *országbíró*）の下で、マイラート、デアーク、ギツィ、ホルヴァートなども参加して開催された）が、オーストリア民法典を選択的に採用して以降、独自の民法典の編纂は、結局、実現しなかった。

(119) 同法案には長い前史があるのだが、専門文献の中で最も詳細なのは（カトリックの立場から書かれたものだが）今でもシャルツのものである（渡邊昭子氏の厚意により同書を参照できた。記して感謝する）。エトヴェシュが義務的民事婚を導入しようとして果たせなかったことは前述した。その後、バチカン公会議が一八七〇年に教皇無謬説を宣言したのに対して、ハンガリー政府は国王の同意権（*jus placetum*）を引き合いに出して国内での公表を禁じたが、これに何人かの司教が従わなかったことから、トレフォルト文相の対応が問われ、一八七三年六月に議会でこの説明要求質疑 *interpelláció* への大臣の返答が否決される事態に至った。これを受けて、デアーク党内で対応を協議した上で、デアークが演説に立ち（議会でデアークの最後の演説となった）、信仰の自由や義務的民事婚の導入の必要性を訴えて、国家教会関係を定める法案を準備する委員会の派遣を提案した。（*Salacz Gábor, Egyház és állam Magyarországon a dualizmus korában 1867-1918*, München: Aurora Könyvek, 1974, 22-75. old. 教皇無謬説以降の歴史とデアークの演説は *Deák Ágnes et al., Deák Ferenc, 164-165. old.* ; *Kónyi Manó összegyűjtette, Deák Ferenc beszédei*, VI. köt. 1868-1873, Budapest: Franklin-Társulat, 1898, 383-416. old.）

委員会は翌年、義務的民事婚の導入を提唱する報告書を議会に提出し、中道左派の議員の発議で、一八七四年六月下旬の議会でこれが議題に取り上げられることになった。そこで、デアーク党の党会合で急遽対応が協議され、ビクトー首相が国王の裁可が得られる形に修正するための時間の必要を訴えて議題から取り下げることを提案し、これが議会で受け入れられた。（委員会の報告書は *Az 1872. évi szeptember hó 1-jére hirdetett Országgyűlés Képviselő-húzáinak irományai*, XVII. köt., Buda: Magyar Királyi Államnyomda, 1875, 132-136. old. 以下では議会文書は *OGY KH irományai*, 1872-75. 巻号、頁数など略記する。下院の議事録「デアーク党の党会合は」 *OGY KH naplója*, 1872-75. XI. köt. 25-26. old. [1873. június 20.], 55-70. old. [1873. június 23.]; *Pesti Napló*, 1874. június 22. 1. old.）

国王は、ヴェンクハイム内閣の最初の閣議を主宰して、議会でも党内でも政府が主導権を握ること、党が政府を主導しないよう釘を刺し、議会上院の一方的行動を批判して、立法には王位Kroneと議会上院の三ファクターの協働が必要なることを強調した。ティサ内閣が成立した時点では、文相は、義務的民事婚ではなく、オーストリアの一八六八年五月諸法と同じように、必要な場合の民事婚の導入を検討していた。その後、最左派(四八年党)のイラーニ・ダーニエルが、毎年の予算審議で文部省(宗教・公教育省)部分の審議の際に、信仰の自由と民事婚の導入に関する法案を上程するよう政府に求める動議を繰り返し提出したが、前者を不要とし後者はいずれ上呈すると述べる政府の立場を与党自由党は支持した。一八八一年になって漸くティサ内閣が議会に提出した法案は、一八六八年のキリスト教諸宗派間の婚姻に関する法制が認めていなかったキリスト教徒とユダヤ教徒の間の婚姻の場合に、民事婚を導入するものだったに過ぎない。(閣議について、Kozári, *Tisza Kálmán ...*, 246-247. old.; Protokoll der ... Minister-Conferenz, 2. März 1875, ff. 5-8; Jegyzőkönyve ... ministeri értekezletnek, 1875. nov. 2. ff. 3, 5. Magyar Nemzeti Levéltár Országos Levéltára, W12. Minisztériumcsí jegyzőkönyvek (K27). <https://adatbazisokonline.hu/adatbazis/minisztertanacsi-jegyzokonyvek-1867-1944/hierarchia> 二〇二一年八月三一日接続。以下では閣議録を「MT JK」年月日・フォリオ数「MNL OL W12 (K27)」と略記する。イラーニについてはKovács Emőke, *A magyar parlament Csalója. Irányi Daniel politikai pályája 1868 és 1892 között*, Budapest: Írók Alapítványa - Széphealom Műhely, 2014. 法案は「OGY KH irományai, 1881-84. I. köt. 151-164. old.」

(10) GOTTAS, *op. cit.*, S. 64-65.

(11) 爵位貴族の議席数を(直接税額で飾にかけて)減らし、県知事が議席を失う代わりに、勅選議員制度を導入したが、上院はこれに五〇名の上限を設けること、政府の影響力を限定した。Püski Levente, „A liberális alkotmányosság és az 1885. évi főrendiházi reform”, *Történelmi Tanulmányok. I. szerkesztette L. Nagy Zsuzsa - Veress Géza, Debrecen: KLTE, 1992, 67-81. old.*; Vörös Károly, „A főrendiház 1885. évi reformja (Egy kutatás tervei és első eredményei)”, in *Rendi társadalom – polgári társadalom. I.: Társadalomtörténeti módszerek és források*, szerkesztette Á. Varga László, Salgótarján: Nógrád Megyei Levéltár, 1990, 397-405. old.

(12) CIEGER András, „Az állami kultúrpolitika kibontakozása Magyarországon a dualizmus első negyedszázadá-

ban”, in *A Lajlák innen és túl... Somogyi Éva 70. születésnapjára*, 51-77. old.

- (123) ハンガリー政府のハンガリー国民劇場への補助案に対して、セルビア人議員がウーイ・ヴィデアーク（現ノヴィ・サド）のセルビア国民劇場への補助を要求した際に、デアークは文化振興を社会が寄付で行うよう求めた。デアーク党は、デアークに反して、政府のハンガリー文化優遇策を支持した。*OGY KH naplója*, 1865-68. X. köt. 312-316. old. (1868. november 14.) ; Kónyi, *op. cit.*, 92-96. old.

- (124) ハンガリー国民劇場をめぐる同様の案件で、*OGY KH naplója*, 1872-75. XVI. köt. 161-172. old. (1875. április 13.) ティサがこつて問題にしたのは、少数民族議員が「民族 nemzetiség」ではなく「国民 nemzet」を名乗ったことだった。

- (125) Szabó, „I. rész (1867-1918)”, 136, 140-144. old.

- (126) 選挙区の規模に大きな差が存在し、トランシルヴァニアの小規模な選挙区は、特に腐敗選挙区（与党候補が容易に勝つる選挙区）として知られていた。Ifj. Bertényi Iván, „Képviselői import» Erdélyben, avagy az unió egyik velejárója”, *Tradíció és modernizáció a XVIII-XX. században*, szerkesztők: Bodnár Erzsébet - Demeter Gábor, Budapest: Hungarovox, 2008, 202-213. old.

- (127) 但し、党規律に従順な与党議員に対する「ブムルーク」という蔑称は、デアーク党時代から存在した。チエンゲリやローニヤイのこの語の用い方を参照。Csengery, *op. cit.*, 346. old.; Cseger, „A politika forgószínpadán”, 494. old. この点で著書における注記（ブムルーク〔ティサの支持者〕は「スリーディング」である。Cseger, *Lónyay Menyhért*, 412. old.

- (128) Bölöny József - Hubai László, *Magyarország kormányai 1848-2004*, Budapest: Akadémiai Kiadó, 2004⁵.

- (129) Haidu Tibor, „Fejervány Géza karrierje, avagy miképp lehetett egy magyar Ferenc József kedvence”, *Had-történelmi Közlemények*, 117. évf. 2004. 1. sz. 3-59. old., lásd 30-31. old. その代わり、ティサは次官に文官の自由党政治家を就けた。フェイエールヴァーリは一八八四年から一九〇三年まで、足掛け二〇年にわたって歴代自由党内閣の下で国防相を務めることになる。

- (130) このいわゆる「大防衛力法論争」については、Szatmári Mór, *Húsz esztendő parlamenti viharai*, [Bu-

- dapest]: Amicus Kiadás, 1928, 85-122. old.; APPONYI, *op. cit.*, 169-181. old.; HAJDU, *Tiszikar és közepostály*, 95-97, 294, 301. old.
- (131) 一八六八年の防衛方法は七八年に失効するはずだったが、経済妥協の議会審議が長引いたため、一年延長され、七九年に更新された。
- (132) *OGY KH irományai*, 1887-92. IX. köt. 91-142. old.
- (133) Szabó Dániel, „A véderőütemések résztvevői”, *Korall*, 17. sz. 2004. 43-60. old.
- (134) *OGY KH naplója*, 1887-92. VIII. köt. 283-285. old. (1889. február 18.), 394. old. (1889. február 21.), IX. köt. 61-69. old. (1889. február 26.), 225-230. old. (1889. március 26.); *OGY KH irományai*, 1887-92. XIV. köt. 7, 25. old. 一九一三年に出版されたアンドラーシ伝の著者は、法案第一四条の変更を勝ち取ったのは、君主に謁見した(既にはば政界を引退してゐた)老アンドラーシだったと示唆するが、典拠は記されていない。WERTHEIMER Ede, *Gróf Andrássy Gyula élete és kora*, III. köt., Budapest: Magyar Tudományos Akadémia, 1913, 409-410. old.
- (135) APPONYI, *op. cit.*, 177. old.; *OGY KH naplója*, 1887-92. VII. köt. 227-236. old., lásd 232. old. (1889. január 11.)
- (136) APPONYI, *op. cit.*, 147-148, 174-175. old.; MÉRÉI, *Magyar politikai pártprogramok*, 1934, 51-59. old.
- (137) サバリーは、財政運営を批判されて、一八八七年に蔵相を辞任してから、一時期、閣内を去っていた。この時に農務省が商務省(正式には農・工・商務省だったが、国王主催の閣議、いわゆる王冠会議 *koronatanács* の——従って、ドイツ語の——閣議録では大臣は *Handelsminister* と略記され、ハンガリー語での通称も商務省・商務相だった)から分離され、運輸省(正式には公共事業・交通省)が商務省に統合された。
- (138) シラージは、アポニとの個人的な対立から穏健野党を離党し、防衛力法論争では無党派の野党議員として発言した。APPONYI, *op. cit.*, 150-155. old.
- (139) Kozári, *Tisza Kálmán...*, 508. old.
- (140) 一八七九年の国籍法の規定によって、国外に一〇年以上滞在し、ハンガリー国籍の維持を望む意思表示をしない場合には、ハンガリー国籍を失うことになっていた。これによってコシュートがハンガリー国籍を失うことを恐れた

独立党議員の質問に対して、ティサは名誉県民・名誉市民の称号を贈られて、それを受け取ったことを、国籍法にいう国籍維持の意思表示と見做していると説明したが、それを法文で明示するよう要求した独立党議員に、ティサは国籍法の改定に当たってその点を考慮すると確言した。しかし、その直後にコシュートが書簡で、自らをフエレンツ・ヨージェフ（フランツ・ヨーゼフ）の臣民とは認めないこと、国制の現状を合法と認めないことを表明したことで、コシュートがハンガリー国籍を維持することは事実上不可能になった。国籍法の改定に当たって、ティサは、名誉県民・名誉市民の称号を受け取ることを国籍維持の意思表示と見做すが、このことが法的義務を免除するものではないという文言の挿入を提案したのに対して、他の閣僚はこの文言の前段に遡及効が発生することを懸念して、これを不要と主張した。Lajos János, „A »generális« bukása (adaleklok Tisza Kálmán lemondásának okaihoz)”, *Levelezári Közlemények*, 58. évf. 1987. 1-2. sz. 147-158. old.

(141) *Ibid.*, 154-156. old. 閣内対立が顕になった閣議の後でシラージと会った独立党系ジャーナリストのサトマリーは、ティサを挫折させたシラージの喜ぶ様を伝え、彼の底意を強調する。Szatmári, *op. cit.*, 134-139. old. フエレンツ・ヨージェフ（フランツ・ヨーゼフ）は、一八四九年に彼からハンガリー王位を剥奪したコシュートを決して許さなかったし（四九年四月に公表された廃位宣言の作成に参加した人物の中に、コロヴェ・イシュトヴァーンがいる）、ハンガリー国内でコシュート崇拜が広まるのを苦々しく思っていた。Eckhardt Ferenc, „Ferenc József és a Kosuth-kultusz”, *Magyar Szemle*, 1. évf. 1927. 4. sz. 370-378. old.

(142) 基本的に選挙区レベルの組織に候補者選定の権限があり、中央組織（議員から互選される執行委員会）は調整に当たる程度だった。県や選挙区の地方組織の派遣団が参加した全国大会を開催する試みは野党にしか見られず、当該時期では一八七二年三月の中道左派の「全国左派大会」と、七四年五月の最左派の（合同国制野党が独立党の名称を採択した）「全国野党人民集会」が挙げられただけ。Szabó, „I. rész (1867-1918)”, 66-67, 72-74. old.; Szegeyi, „*Hazának hasznos polgárja kívánok lenni*”, 251-253. old.; Tóth, „A Függetlenségi Párt megalapítása”, 1011-1013. old. 例えば、ギンツィと選挙区コローム市・アポニと選挙区（八一年以降はヤースベレーニ市）の有力者・有権者との関係について Szegeyi, *op. cit.*, 254-257, 273-276, 280, 294, 308-309, 312-315, 319-321. old.; Apronyi, *op. cit.*, 52-54, 68-72, 116-117, 157-159, 236-237. old. 他方、与党候補を当選させるのは県知事の役割だった。

ローニャイの選挙区のあるベレグ県の地方政治エリート（内相の任命する県知事、県議会選出の副知事、国会議員）についてのプロンボグラフィ研究として、CIEGER András, „A Bereg megyei politikai elit a dualizmus időszakában”, *Szabolcs-Szatmár-Beregi levéltári évkönyv*, 12. szerkesztette Nagy Ferenc, Nyíregyháza: Szabolcs-Szatmár-Bereg Megyei Levéltár, 1997, 213-281. old.

(143) 政党システム上で、他国との関係がこのような規定的な役割を果たした事例として、アイルランドを挙げることができるだろう。アイルランドでは、一九二二年の対英条約への賛成・反対がクマン・ナ・ゲール（フィネ・ゲール）とフィアナ・フォールの間の主要な対立軸を構成する。 Cf. Peter Mair, *The Changing Irish Party System: Organisation, Ideology and Electoral Competition*, London: Pinter Publishers, 1987.